平成29年8月1日発行第14巻第4号通巻108号

cover illustration by 竜胆

二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

2017 08 Volume.95 DIGITAL EDITION

18 未満

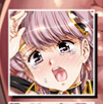
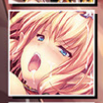
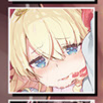
今号の Special Fetishism Series 特集

丸呑み

ぬめる肉壁に柔肌を揉み込まれ、ヒロインの意志が粘液に蕩かされてゆく…

【えっちマンガ】
時丸佳久
しーあーる
ジンナイ
もみやま
飛沫おろし

【連載&読み切り小説】
有機企画×緑木邑
酒井仁×桐島サトシ
千夜詠×みかん。
木森山水道×冥土黄泉
峰崎龍之介×大路ろむ
桜空×ひなくま
冬野ひつじ×はらいた
水雲風騎×イチナ

カラーピンナップ COLOR PINUP
うるし原智志
てんまそ
TamU／しろきつね／竜胆

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

試し読み版

人気美少女ゲームが小説&漫画で登場!

粘獄のリーゼ

小説:黒井弘騎　挿絵:竜胆　漫画:楠木りん

リーゼと光流をしゃぶり尽くす
丸呑み陵辱が書き下ろしで登場!!
粘獄のリーゼ
小説／黒井弘騎
挿絵／竜胆

「ちょっと光流！　先行しすぎよ、もう少し周囲に注意を……」
「あら、ご忠告痛み入りますわリーゼ様。けれど問題ありません、すでにわたくしの式でこの辺りは調査済み、何の危険もありませんわ」
「それはそうかもしれないけど……でもねぇ！」
瘴気に侵された魔の地下洞を、聖務のために進む退魔師が二人。
一人はボディスーツじみた挑発的な修道服に、それ以上に悩殺的な豊満ボディを押し包んだ美しきシスターだ。
「教会」の実働部隊「イバラの姉妹」の一員である彼女の名は、リーゼ・ヘルデブランド。
生意気そのものに屹立した美巨乳や肉感溢れる太ももは抜群のボディスタイルを描き出し、男の欲情を誘い立てずにはいられない。自信に満ち溢れた麗貌はいかにも気丈で、容易には近づき難い気の強さを窺わせていた。
強気な美貌も熟れた肉体も、とてつもなく挑発的で攻撃的。その凶暴とも言える美しさは、誇り高き牝豹を思わせる。薄手のコスチュームは引き締まったボディラインをいっそう強調し、諸所に施された聖なるシンボルが同時に触れられざる聖性を演出する。男を惑わす魔性の媚肉と神聖なる威厳との同居は、むしろ背徳的ですらあった。
「リーゼ様と違って、わたくしは多忙なもので……いえ、リーゼ様がゆったりと時間を過ごされるのは自由ですし、そのような生き方は正直羨ましいとは思いますけれども」
慎重を期す歴戦の悪魔狩りを、もう一人の退魔師は丁寧に、しかし慇懃な言葉で拒絶する。
見事な黒髪に紅白を基調とした巫女装束が目を引く退魔師の名は、荒神光流。魔都「東京」に本拠を置く退魔師の名家、荒神流の一員だ。
リーゼと比べ年若く、まだ幼さを残した顔つきは、少女と呼ぶのに相応しい。だがあどけない幼貌に反し、その肉体の発育ぶりはシスターに勝るとも劣らず、特にはちきれんばかりに巫女装束を押し上げる巨乳の量感はリーゼすら上回るほど。鋭く切れ上がったレオタード状の股布や、無防備に腋窩を晒すボディスーツなど、際どすぎる退魔装束からは瑞々しい肉肌が露わに晒されている。
無垢そうな外見に拘わらず毒舌で計算高い、この少女もまた、数多の死線をくぐり抜けてきた熟達の退魔師なのだ。
「っ……何よあんた、喧嘩うってるの!?」
「いえいえ、とんでもない。申し上げましたでしょう？　わたくしは多忙ですので、そのように無駄にして良いような時間はありませんわ」
「あ、あんたねぇ……！」
売り言葉に買い言葉。
涼しく受け流す光流に、激情で食いかかるリーゼ。
二人は目的を共にする退魔師同士だが、その相性は最悪で、こうして事あるごとに激突していた。
「まぁ、この程度の退魔業など、わたくし一人でもまったく問題はありません。リーゼ様はゆっくりとしていてくださっても構いませんわ」
底意地の悪い微笑みを浮かべ、洞窟の先へと足を進める光流。肉感的な美脚を太ももまで押し包む長足袋が床を踏みしめるたび、にちゃ、ぐちゃっと音を立てて粘液が滲み出す。
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　一人で進むのは危険よ……っと、なによこのネバネバ……うあ、っきゃあ!!」
後を追うリーゼのブーツも、染み出した白濁でべっとりと汚される。
さらには同種の粘液が天井からも滲出し、いやらしく糸を引きながらシスターヴェールを滴り落ち、紫色の長髪までもがべっとりと汚辱された。
「うぅっ……さ、最悪！　ネバネバして、へばりついて……うう、顔までベトベトだわ。な、何よこれ……も、もう……！」
「あらリーゼ様、言いませんでしたか？　この洞窟はすでに異界化していますわ、このような粘液に汚されぬように注意なさらないと……おや、遅かったようですわ、お許しください」
「く、く、く……み、光流……あんたねぇ……」
粘液にまみれたまま、怒りに美貌を震わせるリーゼ。一方の光流は前もって洞窟内の異変を把握していたのだろう、安全な場所のみを進んでおり粘液の直撃は受けていない。
（確かに……認めるのは癪だけど、あのコの実力は確かだわ。この辺りの安全は確認済みなんでしょうけれど……）
二人が挑むこの地下洞は、魔界の瘴気に蝕まれ、それ自体が異界化してしまっている。
ボコボコと脈打つ肉塊や血管、粘液にまみれた不気味な粘膜など、洞窟の壁や天井は有機物のように変質しており、まるで生物の体内を思わせる有様だ。場所によっては不定期に粘液が噴き出しており、リーゼは運悪くもその直撃を受けてしまっていた。
（ヌルヌルして、粘っこくて……さ、最悪だわ。確かに……こんな場所、さっさと通り抜けたほうがいいかもしれないわね）
周囲には瘴気が満ち、空気までもが粘っこく感じるほどに湿度も高く、不快なこと甚だしい。
確かに周囲に敵の気配は感じないし、使い魔による諜報も信頼できる。ならばここは急いだほうが得策か――光流の言葉に従うのは癪だが、そう自分に言い聞かせ、リーゼもまた足を早めた。
「ちょっと、待ちなさいよ光流！　って、うわっ、またネバネバがいっぱい……くぅ、さ、最悪！」

著者近況
「粘獄のリーゼ」ご好評いただきありがとうございます！　お陰様でまたリーゼと光流を描くことが出来ました。この二人には丸呑みも似合いますね！　次は「呑獄のリーゼ」なんてのもいいかもしれませんね。

「あらリーゼ様、無理なさらなくても結構ですのに……大丈夫、この周囲は安全ですから……!?」

そんな様子を見て、底意地の悪い微笑みを光流が浮かべた――その瞬間、だった。

ぐにゅる……にゅる、にゅるるるるるっ！

「なっ……何ですかこれ……っきゃあああ!?」

「!? み、光流……っく、あああっ!?」

突如、洞窟全体が大きく脈を打ち、形を変えた。

天井に巨大な穴が開いたかと思うと、それ自体がそのまま真下へと伸出し、光流を頭からすっぽりと呑み込んでしまう。

異変に気づいたリーゼが駆け出すよりも早く、床にも巨大な肉穴が展開し、大口を開いてシスターを足先から呑み込んだ。

「うっ、な、何よこれ!? こんなの聞いてないわよ……っく、う、ううぅっ！」

ひどく原始的な仕組みだが、自分より大きな落とし穴に落ち込めば身動きの取りようもない。せめて奈落までは引きずり込まれまいと両手で肉穴の縁を掴み、なんとか身体を支えるのが精一杯だ。

その間にも洞窟内の変異は進み、まるで胃袋のように変形した天井へと、光流は見る見る呑み込まれていってしまう。

「うぐっ、んむ、っぐうぅぅ～～!? な、なんですのこれは……魔物の気配などどこにも……んぐうぅ、んむ、っぶ、んっぐうぅぅぅぅ～～！」

光流の有様は、足から呑まれたリーゼよりもずっと悲惨なものだった。上方からの奇襲で頭から呑み込まれ、上半身全てを肉袋にすっぽりと包み込まれてしまっている。狭苦しい肉袋の内部は大量の粘濁にまみれ、生々しく蠢く肉の凹凸に顔や胸をぎゅうぎゅうと押し潰された。あまりの狭さに腕を動かすどころか身じろぐことさえ出来ず、猛烈な吸い上げに徐々に身体を呑まれてしまう。無事なのは腰から下だけで、なんとか足掻こうと両足をジタバタと暴れさせるさまは、滑稽でさえあった。

「っ……光流！ ま、待ってなさい、今助け……っうぅ、きゃあああっ!?」

そんな光流よりもマシとは言え、リーゼの置かれている状況も決して平易ではない。肉床全体がぐねぐねと変形し、巨大な肉筒状に盛り上がって聖女の下半身を呑み潰す。肉穴の深部からは無数の触手が伸び出して、もがく両足に絡みついた。ねばついた粘液をブーツに塗り込められながら太ももまでを拘束され、そのままグイグイと引っ張られて奈落へと誘われる。

「くっ……こ、この！ 舐めるんじゃないわよ、こんな雑魚にこのわたしが……っく、う、ううぅ～！」

強気に抵抗するリーゼだったが、しかしさしもの悪魔狩りとは言え状況が悪すぎた。

深々と開いた肉穴に下半身を呑み込まれ、筒状の肉袋に締め上げられて完全に足を殺された状況。これ以上呑み込まれまいと両手で身体を支えた状態では、少しも腕の自由も利かないのだ。

（くっ……屈辱だわ！ このわたしが、こんな……！ 咎人の剣さえ使えれば、こんな雑魚悪魔、敵じゃないのに……！）

怒りと屈辱に、クールな美貌が歪む。

擬態程度しか取り柄のない魔物など、悪魔殺しの聖剣を振るえば、一瞬で八つ裂きにしてやれるのだ。いやむしろ、たとえ武器がなかったとしても、イバラの姉妹が不覚を取るような相手ではない。

なのに初動での不意打ちを許したせいで、圧倒的に不利すぎる不様な状況に陥ってしまった――プライド高いシスターは、不覚を取った自分が何よりも許せず、ギリギリと歯噛みして懊悩した。

「ぐぶっ、リ、リーゼ様……おごっ、んぶ、んぶうぅぅっ！ も、申し訳ありません……こ、このような……んぐ、んぶ、んっぐうぅぅぅ～～！」

「み、光流っ……くっ、今さらそんなこと言ってる場合じゃないわよ！ 早く抜け出さないと……っく、う、うううう～～！」

ぐちゃっ、にちゃ、ぐちゅっ、にちゅちゅっ！

二人を呑み込んだ肉口が淫猥に脈動し、それぞれの半身を締め上げ押し潰し愛撫する。肉袋内部にたっぷりと蓄えられた粘液がブーツから染みるほどにたっぷりと塗りつけられ、あるいは苦悶に歪む美貌に何度も何度も粘りつけられた。

（うう、さ、最悪だわ！ こんな……悪魔の存在に、気づけなかったなんて……！）

光流の式が発見できなかった、そしてリーゼでも感知できなかった悪魔の存在――だが、それもそのはずだ。

この地下道自体が悪魔の肉体であり内臓――この穢れた地には、最初から魔物が取り憑いていたのだ。ならば、その内部を探索しても発見できるはずもなく、安全の確保など見当違いにも程がある。

地下道へ足を踏み入れた時点で、リーゼと光流は、自ら悪魔の体内へと進んで入り込み、その身を捧げてしまっていたのだから。

「ちっ……ま、まだよ！ 見てなさい、こんなの、すぐに脱出して……うぁあ、あ、っくうぅんっ！」

必死で両手に力を入れ、一気に下半身を引き抜こうとするイバラの姉妹。ぶるんっと巨乳を揺らし、なんとか身体を肉口から引き上げようとする。

しかし、せっかく捕らえた極上の獲物を、みすみす逃す悪魔ではない。肉筒状の口穴が窄められ、足先から太ももまでもをぎゅううっ、と力強く締め上げて、下半身を咥えこんで放さない。さらには無数に伸び出した舌状の触手がタイトスカートの生地を掴み、力任せに引っ張って聖女を奈落へ引きずり込む。

著者近刊 「新装版 聖天使ユミエルⅡ ダスクリベレーション」「ディバインハートマキナ ～反逆の女神～」「エンジェルストライカーズ」「超昂閃忍ハルカ スパル虜囚魔辱編」「超昂閃忍ハルカ 堕ちたる上弦 淫辱の刃」「鮮血の聖女エクレア 聖なる執行者」ほか

装甲獣姫
サクラヒメ
フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女
第三回 屈辱の地下バトル　公開羞恥地獄
小説 NOVEL／有機企画
挿絵 ILLUSTRATION／緑木邑
サクラヒメ、レスラーに転身!?
恥辱のフタナリ
レスリングショー開幕！

登場人物紹介

建宮流華

日本対魔協会に所属する戦姫。「装刃戦姫サクラヒメ」に転身し、人に仇なすオニグミを滅殺する。

鬼蛙

オニグミを束ねる幹部。蛙坂蔵夫という名で流華と同じ学園に通い、彼女を徹底調教する。

三城良平

流華の幼馴染みにして恋人。戦闘能力はないが、彼女を精神的に支える心やさしき少年。

前号までのあらすじ　人に仇なすオニグミと戦う装刃戦姫サクラヒメこと流華。対魔協会最強と謳われていたが、鬼蛙の罠にかかり敗北してしまう。股間にペニスを生やされ、地獄のようなフタナリ調教を強いられるのであった……。

「すまない良平。今日のデートは行けない」
「え。どうしたの流華？」
身を切られるような思いで、スマートフォンに口をあてる。建宮流華はできる限り平静をよそおい、続きを口にする。
「昔お世話になった道場に稽古を頼まれた。みんな両親のいないわたしによくしてくれて、断るわけにはいかなかったんだ」
「……そうなんだ。残念だけど仕方ないよね。今から間に合うの？」
「ちょうど駅についたところだ。山奥でしばらくは連絡もできない」
「ぼくも一緒に行きたかったけど無理っぽいね。デートはまた今度にしようか」
がっくりした様子を見せないように、少年は普段と同じに調子で返事をする。最近元気のない彼女に気を遣わせたくない。彼なりの優しさだ。
「面目次第もない。この埋め合わせは必ずする」
「あはは、流華は真面目だね。それじゃ、次のお昼をおごってもらおうかな。焼きそばパンとかさ」
「フッ、承知した」
聞きなれた声に鼻の奥が熱くなる。通話を終了すると、流華は双眸の奥に真剣のごとき鋭さを宿らせた。
瞳に映る景色はどこからどう見ても駅ではない。
あるのは岩盤をくり抜いて作られた闘技場。ここ闇の住人が集う人工島の地下深く。狂気と瘴気が渦巻く魔境なのである。
中でも一際目を引くのは、闘技場中央にあるプロレスめいたリングだ。リングを囲むように階段状の観客席も設けてある。
ここで日夜オニグミたちが賭け試合を行っているのである。もちろん賭けるのは金銭だけではない。出場者の命もだ。
「そんなに殺し合いが好きか。化け物どもめ」
護身用の木刀を握りしめ、吐き捨てる。従業員も観客もすべてオニグミのため、セーラー服姿の流華はかなり浮いた存在だ。
「暴力に惹かれるのは人間と変わりないと思うけど」
「蛙坂……」
いつの間にか隣には鬼蛙がいた。動きやすいのか姿は蛙坂蔵夫のままだ。ニキビ顔でいつものように薄ら笑いを浮かべている。
流華は刺すような殺気を隠そうともせず、今日のゲームについて問いかけた。
「今回はリングでの格闘戦。早い話、殴り合いで勝てばいいんだな？」
「そうだけど、なんだか随分と自信ありげだね。勝算でもあるのかい？」
「ふんっ。これまでは卑怯な策略で遅れを取ったが、小細工なし、正面からの闘いで負けるものか」
拳を握り、不敵にほほ笑む。この試合も蛙坂が提案したゲームの一環だ。条件は以前と同じで、勝てば良平に手を出さず、正々堂々と立ち会う。負ければ恥辱の罰ゲームである。
「ご勝手に。ただ、対戦相手はボクの部下だからね。油断してると足元すくわれるよ？」
「いまさら雑魚に苦戦するものか。見ていろ。前回の屈辱を万倍にして返してやる。約束を破るなよ」
「もちろんさ。キミの勇姿を期待しているよ」
鬼蛙はリングコスチュームを投げてよこすと、ひらひらと手を振り観客席へ向かう。流華は不機嫌にそれを受け取り、少ししてから顔を赤くした。
「こっ、この衣装は……っ!?」
「カワイイでしょ。キミに似合うようにボクが選んだんだよ」
「き、貴様という奴は……っ！」
「バイバ～イ」
マイペースに歩いていく鬼蛙。流華はその様子を憮然とした態度で見送り、手元の衣装に目を落とした。似合うと言われた衣装だ。
唇をぎゅっと結び、つぶやく。
「……あの変態」

◆◆◆◆

闘技場はあっという間に化け物で埋め尽くされた。最前列から立ち見までどの席も完売だ。
憎い装刃戦姫が嬲られる姿を見ようと、かつてない賑わいである。
司会の一つ目玉がリングに上がり、口の見えない顔面にマイクをあてる。選手紹介の始まりだ。
『これより第三〇一回鬼刻試合を開始させていただきます！　まずは赤コーナー！　八大鬼、鬼蛙さまの右腕、土愚鬼の入場です！』
派手な音楽に合わせて、土愚鬼がリングに上がる。
「ウオオォーッ！　オレの活躍見とけよ！」
歓声を浴びながらガッツポーズを決める。プロレスラーのようないで立ちで、見た目は人間とまったく変わりない。額に生えた一本角がなければ、完璧な擬態だ。
これは試合のルールに『サクラヒメは神器転身せ

ず、自分の腕力のみで戦う』『オニグミも本来の力をセーブし、人間の姿で戦う』という取り決めがあるからだ。
呪力を使ってすぐに決着が着いてはつまらない。できるだけ長く辱めようとする、鬼蛙の企みである。
（良平。いってくる）
次に流華がリングに上がる。甲冑や大太刀がなくとも装刃戦姫としての矜持が瞳に燃ゆる。
『青コーナーから入場するのは憎っくき我らが怨敵！　装刃戦姫サクラヒメです！　鬼蛙さまの協力で、今回特別に参加を取りつけることができました！　お力添えに感謝であります！』
ビリビリと空気が震えるほどに、装刃戦姫を口汚く罵る声と、鬼蛙をたたえる声援が沸き上がる。
「騒がしい奴らだ」
ロングの黒髪を後ろで結び、涼やかなポニーテールをなびかせる。しなやかな肢体がいっそう際立ち、望まずとも男性を魅了する。
（んっ、やはり……動きづらいな）
モジモジと太腿をすり合わせる。どうにも落ち着かない様子だが、それもそのはず。今の彼女が身につけているのは、欲情を煽る変態としか言いようのない衣装であった。
青を基調にしたリングコスチュームはぴっちりと肌に張りつき、乳輪や乳首の形が丸見えだ。股間のVラインも強調され、後ろからは重量感のある尻肉がはみ出している。
股間には穴が開けられ、フタナリペニスと金玉が丸出しになっていた。さらにペニスと金玉には薄いゴムカバーが被せられ、勃起状態が一目でわかってしまう。全裸よりも恥ずかしい格好だ。
恥部を限界まで強調するやり方に流華は身を震わせる。
（またこんな辱めを……いや、勝てばいいんだ。気にするな）
内心では強がっても、ついイチモツを意識してしまうフタナリ乙女にはこれだけ大勢の目に晒され、見世物にされる屈辱は相当だ。
風明刃が手元にあるなら一人残らず斬り伏せているだろう。
「グヘヘヘ、いい格好じゃねえか。せいぜい楽しませてくれよ」
「チッ……口を開くな。汚い息がかかる」
「言うじゃねえか！　その言葉よく覚えとけよ」
十センチもない距離で、互いに火花を散らす。
『それでは皆さま、声をそろえてカウントしましょう！　テーン！　ナイーン！　エーイト！』
一つ目玉が実況席に座り、カウントを開始する。観客席のオニグミたちが声を張り上げる。黒髪乙女と土愚鬼は自分のコーナーに戻り、精神を研ぎ澄ます。
「キミの本性を暴いてあげるよ。サクラヒメ」
鬼蛙が嗤った。
『スリー！　ツー！　ワン！　レディ～、ゴーッ！』
ゴングが甲高い音を響かせ、試合がスタートした。
流華の勝利条件は、『制限時間の十分以内に土愚鬼ノックアウト』か、『射精を我慢したままタイムアップまで逃げきる』かだ。逆に土愚鬼はあらゆる手段で射精を狙う。
「推して参る！」
野ウサギのようにマットを蹴り、瞬きのうちに土愚鬼との距離を詰める。
（欲情が疼く前にカタをつける！）
両の拳を構え、土愚鬼が振りかぶると同時に連続でパンチを放つ。
「ハアアアァァッ！」
大ぶりのストレートは空を切り、流華の拳がマシンガンのように炸裂する。強靭な腹筋を叩きのめし、一気呵成にロープ際へ追い詰めた。
（いける！　このまま決めてやる！）
身体をひねり、流華の右脚から白刃のごとき上段回し蹴りが放たれた。
「グッ！　ガッ……ハガアッ！」
こめかみを押さえながら土愚鬼は膝をつく。
（やったか⁉）
確かな手ごたえを脚のしびれから感じる。しかし、確信はすぐに困惑へと変わった。
「なーんてな」
土愚鬼は素早い動きで流華の足を払い、背後に回ると、両足を両脇で抱え込んだ。そのまま馬乗りになり、足を反らせて締め上げた。
強烈な痛みに悲鳴が上がる。
「っ……あぐうぅぅっ！　はっ、離せ！」
「あんなショボいキックで勝ったつもりか？　甘いっつーの」
懸命に手足を動かし拘束から逃れようとするが、力の差は歴然だ。
「ひぐっ、んん、くうぅぅ～！」
土愚鬼は獲物が動けなくなったことを確認すると、したり顔で解説を始めた。
これからの陵辱を想像し、顔面が喜悦に歪む。
「オレはプロレスが得意でなあ。特に悶絶する表情が大好物なんだよ。どうだ逆エビ反りの味は？」
「ぐっ、はな……せ……！　下衆が……！」
「まだやるきかよ。だったら、しっかりと教育してやらねえとなあ！」
土愚鬼はさらに足を反らせ、股間のフタナリペニスを晒しものにする。ブラブラと揺れる肉竿が滑稽だ。
プラン♥　プラン♥　プランプラン♥
「ッ……！　んうぅ、くひいいいぃぃん！　見せるな……ぅう、このおっ！」

凶悪な極め技に、甘い声を上げてしまう黒髪美少女。淫欲に慣らされた肉体は圧迫の苦しさにも敏感に反応してしまう。チンポがビンッと勃起し、ゴムカバーが伸長する。

「あ……あぐ……あぐうぅ！　ひゃああ、ふあああああっ！」

Gカップ巨乳はマットに押しつぶされ、豊かに弾む。コスチュームの上からでもわかるほどに、乳首が立ってしまう。

ただ痛いだけのはずなのに、身体が疼いて仕方がない。

「テメエみてえな雌奴隷はどんなプレイでも感じるだろ？　気持ちいいって言っても構わないんだぜ？」

「誰が言うか……ンうぅぅ！　んっ、はぁ……ああ……ざ、雑魚鬼が調子に乗るな！」

「兄貴の命令は聞けてもオレは無理ってか。いやなら今すぐイカせてやろうか？」

「う……ぐうぅぅう……」

流華はリングサイドの電子パネルを見た。無機質なパネルには八分十秒と表示されている。まだ試合開始から二分も経過していない。

（まだあんなに……し、仕方ない……）

今は言いなりになるしかない。ここで責められて射精すれば試合が終わってしまう。

下唇を噛み、ためらいがちに口を開く。

「い……いい……」

「あ？　なんだって？」

「い、痛いのが……いいんだ……」

「小声じゃ聞こえねえよ。ほら、会場のお客様にわかるように、もっと大きな声で言ってみな」

土愚鬼は司会からマイクを受けとると、圧迫される巨乳に挟ませ、口元へ近づける。

パイズリをするような格好に赤面する装刃ヒロイン。声を震わせ、気持ちを声にする。

「き、気持ちいいっ！　い、痛いのが気持ちいいんだ！　ふぁ、ふはあんっ！　ん……極められて感じてしまうぅ……くぁんッ！」

「どのポイントがいいんだ？」

「お、おチンポ！　わたしのはしたなく勃起したおチンポがいいんだ！　ひぅ、あ、あああっ！　見世物にされるのいいっ！　逆エビ反りでおチンポがよくなってしまうぅっ！」

淫猥心境を暴露しながら悶える乳牛乙女。体重をかけるたびに乳首がマットに擦れる。敏感な勃起乳頭をコリコリと弄ばれてしまう。

「ひっ……ひゃあんっ！　ふひゃあぁぁあん！　そ、そこ……だめだぁっ！　ひぅ、うぅぅっ！」

「なんだ乳首も感じてんのかよ。しょうがねえ淫乱だな」

「淫乱なんかじゃ……！　ふぁっ、あっ、あっ、ひゃあぁぁ！　こ、擦れるうぅぅう♥　オッパイ感じすぎるんだ！　わたしの大事なところ弄くるなあ！　うひゅんぅ！」

「ったく、情けねえな」

「ああ、はぁん……！　ふ、ぐぅう、情けなくなんか……ない！　あひゅうぅぅうん！」

桜色のポッチを充血させながら、はしたなく喘ぐイキ乳首戦姫。口の端からはよだれがこぼれ、耳まで朱に染まる。膣孔からは淫蜜がにじみ出し、股布にシミをつくった。

包茎肉竿もビンビンに勃起し、天井に向けて反り返る。カウパー汁でゴムカバーの内側はビショビショだ。

「んむ……ああ、ひイィィィン！」

「そそる反応をしてくれるな。まさか彼氏よりもオレに乱暴されるほうが好きなんじゃねえだろうな？　ま、あんなモヤシじゃ満足できねえか」

「っうう……良平を……馬鹿にするなっ！」

喉から声をしぼり出し反抗する。自分のことならまだしも、大切な恋人を汚されたくない。彼のことを想うと申し訳なさがこみ上げてくる。デートをすっぽかし、嬲られているのだから。

「へえ、そうか。まだ仕置きがたりねえみたいだな」

「うう、くうぅ、なにを……？」

土愚鬼は流華を仰向けにすると、自分の肩に乗せアゴと太腿をつかむ。そして、首を支点に身体を弓なりに反らせ抱え上げた。

アルゼンチン・バックブリーカーの体勢だ。

「はぐっ!?　は、はにゃせ……うっぐうぅぅっ！」

喉を反らし、黒髪乙女は悲鳴を上げる。だがもう遅い。土愚鬼は丸太でもへし折るように両腕へ力をこめた。

ギリ！　ギリギリ！　ギチチチィ！

「ひぐ！　うぐウウゥゥ～ッ！　ほうぅぅぅぅぅぅっ！　おごおおぉおっ！」

鍛えられた肢体が和弓の弦のごとく引き絞られる。力技で乙女の身体が弄ばれる。

フタナリ陰茎は天狗の鼻のごとく起き上がり、凄まじい快美が尿道を奔る。つんざくような嬌声が可愛いお口から飛びだした。

「ひぎいいいいぃ！　ひっ、は、ああっ♥　あひいいいいい！　おひいい！　ダメッ！　ダメッ！　それだめえぇぇぇ♥」

「わかるようにしゃべれって言っただろうが！　もっと声出せ！」

「ち、ち、チンポだ！　チンポがいい！　勃起おチンポがダメになりゅ！　物みたいにされてるのに、感じすぎりゅうぅぅぅう！」

「その勃起おチンポで一番興奮しているのはどこだあ？」

「ひうっ、はふうっ！　き、亀頭！　チンポの亀さん！　それからカリ首だぁ！　あひっ！　ひうぅぅ

著者近刊　『天煌聖姫ヴァーミリオン　フタナリ調教されちゃう母娘ヒロイン』　好評発売中！

うっ♥」
「教えてくれてありがとよ。お礼に言った箇所を重点的に掻いてやるよ！」
太腿を押さえる右腕の中指が、カリカリとエラを引っかく。そよ風のような刺激でも、技をかけられた流華には劇薬だ。
「ヒッ、ひいいいいんん！　あああぁああっ！　ふはあああん！」
「おらおらおらぁ！　どうだあ！　ここかあサクラヒメ！」
「へ、ええ、へええぇぇぇぇ！　掻くのやめろぉ！　おチンポで遊ぶにゃあ！　お、おかしくなるうぅうううう♥」
ビクンッ、ビクンとのけ反り、今にも達してしまいそうな早漏乙女。バックブリーカーが闘志を削る。
「ハハハハ！　なんて情けねえ姿だ！」「あの装刃戦姫がチンポ弄られて喘いでやがるぜ！」「あーあ、みっともねえ」
観客の罵声や嘲笑が被虐快感を増幅し、脳天を痺れさせる。このままでは射精するもの時間の問題だ。電子パネルの時間はまだ五分以上あるというのに。
（こ、このままじゃ射精してしまう……！　ダメだ……良平を助けないといけないのに……！）
美貌を引きつらせ、射精絶頂に耐える。しかし、快悦に痙攣する黒髪乙女の嬌声は唐突に止まった。
土愚鬼がバックブリーカーを解き、流華をマットへ降ろしたからだ。水を差され、観客席からブーイングがとぶ。
「ハァ……ハァハァ……！　な、なにが……！」
拘束から解放され、荒い息を吐く。身体は自由になったが、体力の消耗が激しく、しばらくは立つこともできそうにない。
（これで終わりにするはずがない。……まだ何かするつもりなのか鬼畜め！）
次の陵辱に備え、必死に手足を動かそうとするが間に合わない。愛撫を早めに切り上げたのは、さらなる恥辱に突き落とすためだったのだ。
土愚鬼は胸元からマイクを抜き取ると、観客席に向け宣言する。
「オレの真骨頂いかせてもらうぜ！　覚悟しとけよサクラヒメ！」
四つん這いの流華へ近寄ると、ゴムでできた球体を取り出した。細長いチューブがつながれ、先端にはノズルがある。
「な、なにをっ⁉」
「へへ、空気浣腸は初体験だろ？」
「浣腸……⁉」
ゴム球体の正体は、空気式の浣腸器だ。球体の部分を押すことで、空気をポンプすることができる。
「どんなに気の強い女でもコイツの前じゃ泣いて許しを乞う。謝るならいまのうちだぜ」
「くっ、クズ鬼め！　わたしを舐めるな！」
「へへ、どうやらお浣腸をご希望のようだな」
ノズルが桃色の菊門に挿入され、羞恥淫獄が始まる。土愚鬼はゴムをにぎり、勢いよく空気を入れる。
シュコ♥　シュコ♥　シュコ♥　シュコ♥
「はうっ！　うんうぅうううっ！　くうううっ！」
カエルのように腹へ空気を送られ、目を見開き悶絶する黒髪戦姫。抵抗したいが力が入らない。
「ひぐうっ♥　や……やめっ……やめろぉっ！　膨らむっ！　お腹が……膨らむ……！」
「そのつもりだからな。ガハハハハ！」
「ぐ、ぐひいぃっ！　あふぅぅっ！　ふひぃっ！　うひぃっ！　い、いやだっ、もうだめっ！　入らないって言ってるだろぉ！　こ……これ以上は……」
シュコ♥　シュコ♥　シュコ♥　シュコ♥
「よおく入ったぜ」
「う、お腹が……むぐうぅ……！」
限界まで空気を入れるとマイクを肛門に近づける。ショーの準備が完了した。
「ケツ穴に限界まで空気を入れるとどうなるか⁉　てめえら聞き逃すんじゃねえぞ！」
「ひ……ひっ！　うっ……うそだろ⁉　や、や、やめっ……やめろおぉおおおお！」
少女の懇願もむなしく、ノズルが引き抜かれる。火口のように盛り上がった肛門がヒクヒクと痙攣する。
「やっ、ああ……い、嫌だ！　こんなの嫌だっ！」
「盛大にぶちまけちまいな！　変態女！」
「んっぐうううぅう！　で、出るなぁっ！　出るなああアアァッ！」
土愚鬼はマイクの音量レベルを最大に設定し、菊門へ密着させる。流華は歯を食いしばり、決壊を先延ばしにするが長くは続かない。直腸はたまった空気を押し出そうと蠢く。
「装刃戦姫サマの屁はさぞかしいい音色なんだろうなあ！　楽しみだぜ！　ハハハハッ！」
「こ、殺す！　殺してやる！　この下衆がああぁぁっ！　うぐっ、ああぁ、うあぁぁあっ！」
肛門括約筋がおののき、ガスが漏れる。破滅の瞬間が訪れた。最低放屁の瞬間が。
プウッ！　プウッ！　ぷぴピッ！　ブププ！
「やっ、ああ……！　うぐあああうぅうっ！」
最初に可愛らしい音が漏れ次の瞬間――
ブッ！　ブブッ！　ブビビビィィィィッ！　ブピピピピ！　ブボボボボオオォォッ！
オーケストラのような盛大さで屁が噴き出した。闘技場すべてに響き渡るような大爆音だ。
「いっ……いやぁぁあぁぁぁ‼　聞くな聞くなあぁぁあ‼　やめてくれえぇぇぇぇ‼」
肛門を隆起させながら絶叫するオナラ戦姫。しわを一本残らず伸ばして、桃色の内壁を晒しながら屁

をこきまくる。
「あはははは、くっせぇ！」「なんだよこれ！　臭すぎんぞ！」「初めて聞いたぜ！　装刃戦姫も屁をこくんだな！」
「だ、黙れぇ、聞くな！　音なんて聞くなぁ！　んぐっ♥　くううぅ～♥」
観客席が沸き、オニグミが大笑いする。いっこうに鎮まる気配を見せない屁を嘲笑する。
「ブウブウって豚かよっ！　恥ずかしい！」「酷い匂いだな。気分が悪いぞこら！」
「うるさいうるさいこの変態どもが！　うぐっ♥　むううっ♥　ひくううう♥　うぐいいいい♥」
黒髪乙女の放屁は勢いを増し、とてもやむ気配はない。ニオイも凄まじく、リング近くにいたオニグミはそろって鼻をふさいだ。
「まったく鼻が曲がるぜ！　女として終わってるよな！」「ああ！　オレなら自殺してるね！」
「ひぐっ……うう♥　も、もうやめてくれ……こんなの恥ずかしすぎる……惨めすぎる……」
大勢の前で屁をこき羞恥に濡れる装刃戦姫。瞳からは涙がこぼれ、顔を上げることができない。
（わたし最低だ……）
「豪快な音色じゃねえかサクラヒメ。見事なオナラだったぜ、あーくせえ。くせえ」
「い……言うな！　言うなぁ！」
わざとらしく鼻をつまみ、顔面を醜悪に歪める。だが、これで満足する土愚鬼ではない。男根型のバイブを取り出し、まだ空気の残る肛門へ挿入する。ヌルついた粘液を潤滑剤に、直腸を蹂躙する。
グチュッ♥　グチュチュッ♥　ズチュグチュ♥
「どうだあ？　ケツの穴にニセチンポは最高だろ？　おら情けなく射精しちまいな！」
「あふっ♥　やぁっ♥　そ……そこいま敏感になってるからあっ！　こするなあっ♥　ほふっ♥　ち、チンポぉ♥　おチンポも感じてるうっ！　なっ……なんでお尻弄られて感じてしまうんだ!?」
休む間もない肛辱にのけ反る恥かき乙女。股間の包茎ペニスは肛悦に反応し、今日一番のエレクチオンを見せていた。バイブの隙間から漏れ出るオナラも羞恥心を煽り、ペニスを固くさせる。
残り時間は三分を切ったがこのままではとても我慢できそうにない。土愚鬼は苦しむ少女の心へつけこみ、淫辱を加速させる。
「どうだ？　やめてほしいかあ？」
「頼むやめてくれ！　ここままじゃ射精してしまうっ！　ザーメンぴゅっぴゅっしてしまう！」
「だったら、もうわかるよなあ」
「そ、それは……」
「なあに、少し時間を稼げばいいだけさ。悪い提案じゃねえと思うぜ」
「わかった言う！　言うからお尻ズボズボしないでくれ！　も、もうイキそうなんだ！」
バイブの動きが止まる。流華は四つん這いの姿勢でマイクを受け取った。
最低のセリフがつややかな唇から発せられる。
「お前がやったことはなんだ？」
「お……お、オナラだ……」
「違うよな。屁だろ、屁をこいたって言えよ」
「あ、ああ。わたしは屁をこいたんだ……屁をこきました……」
「全然ダメだな。それじゃあお客様に失礼だろうが！　もっと下品に言ってみろ！」
「あ……ううっ……ああ！　ブーブーオナラです♥　ブーブーオナラでちゃいました♥　屁こき♥　わたしは屁こき女なんだ♥　くっさいくっさいガスを肛門から排出する変態マゾなんだ♥」
半泣きになりながら放屁を説明する。バイブに弄られる桜色の火口からはまだ空気が漏れ出ている。
（お腹にはまだかなり空気が残っている。もしまた放屁すれば、射精してしまいそうだ。……それだけは絶対に避けないと！）
強烈な放屁衝動に抗う黒髪乙女。残り時間は一分四十秒。
「肛門？　もっと相応しい言い方があるだろ？」
「くぅ……あ、アナル♥　アナルですっ♥　アナルから屁が出ました♥」
「ウンコ穴だろうが！　いっつも糞をしてるところだろ！」
「う、ウンコ穴だ♥　毎日汚いウンコをブリブリひり出している糞穴♥　臭くて臭くてどうしようもない糞穴だ♥　ウンコ穴から漏れた最低オナラでお耳を汚して申し訳ない！♥」
天を衝くような羞恥の炎が黒髪美少女を追い詰める。未知の快感にフタナリ肉竿は昂ったままだ。
「今からサクラヒメじゃなくてヘコキヒメって名乗れよ。そっちのほうが似合っているぜ」
「ヘコキ……そ、そうだ♥　わたしは装刃戦姫ヘコキヒメなんだ♥　あたり構わず悪臭をまき散らす糞穴変身ヒロイン♥　日夜オナラパトロールしているバカ女♥　本日はリングを臭くして申し訳ありませんでした♥　屁をこくことが生きがいのヘコキヒメをどうか許してほしい♥」
言い終えた瞬間、会場から嵐のような嘲笑が巻き起こった。憎き敵が四つん這いで屁をこいたことを詫びているのだ。笑わずにはいられなかった。
「う……うぅ……」
屈辱で声も出ない装刃戦姫は、時間のことだけに頭を巡らせる。とても吐いた言葉の意味を考える余裕はない。
（あと一分、ここさえやりすごせば……っ、コイツらあとで全員討滅してやる！）
歯を食いしばり恥辱に耐える。あと少しの我慢だ

百戦錬磨の女幹部エミリアに
迫る丸呑み地獄の魔手！

陵辱、悪の華
～女幹部丸呑み調教～

小説 NOVEL／峰崎龍之介（みねさきりゅうのすけ）
挿絵 ILLUSTRATION／大路ろむ（おおじ）

著者・峰崎龍之介の単行本

『ダンジョン暮らしの元勇者』1～3巻
ビギニングノベルズにて発売中！

世界征服を至上の目的とする秘密結社クライム。その前線基地にて――

『フィフスブレイバーとの交戦データ』

と銘打たれたファイルに目を通し終えて、その女はくすりと笑って見せた。真っ赤な紅に彩られた唇を歪めた、どこか邪悪な笑みだ。ぱっと見の年齢は二十代後半ほど。長く艶やかな黒髪は、彼女の纏う漆黒のドレスに溶け込むように、さらりと腰まで伸びていた。

危険な美女――そう評する他ない女だった。彼女はその容貌に相応しい笑みをさらに邪悪に歪めると、手にしたファイルをテーブルに置いた。

「交戦データ、ね。……敗戦データの間違いではないの？　レディ・ドゥーム」

ドゥームと呼ばれた女――クライムの古参幹部である銀髪の美女は、その挑発にぴくりと頬を引きつらせた。ボンデージ衣装の上に羽織ったマントで隠されてはいるが、肩がぷるぷると震えてもいるので、どうもかなり気に障ったようだ。

「……口が過ぎるぞ、エルミア。お前は幹部とはいえ新参。長年クライムに仕えてきた妾に向かって、そのような口の利き方は――」

「許されない、とでも？　馬鹿馬鹿しい。実際、あなたがあまりにも負け続けるからこそ、わたしが派遣されたのでしょう？」

彼女――エルミアは小さく鼻を鳴らした。それから、開きっぱなしのファイルを示す。

「フィフスブレイバー。五人組の『正義の味方』。地球人の中ではほぼ唯一、我々クライムに対抗できる戦力。特殊な強化スーツの補助を受けて超人的な力を発揮し、またわたしたち同様『エナジー』を運用できる。……なるほど。それなりの強敵のようね。でもたった五人を相手に三年以上勝ち星がないというのは、流石に擁護できる状況ではないと思うけれど？」

からかうようにドゥームの顔を見つめると、銀髪のお局様はぐっと奥歯を噛みしめた。読み上げた内容はただの事実だが、目下の者に指摘されるのはプライドが許さないのだろう。

（その無駄なプライドが、連戦連敗の原因でしょうに）

とは思ったが、口にはしなかった。これ以上ドゥームを言葉でいたぶったところで益はない。

「まあいいわ。現状はどうあれ、わたしの仕事は変わらないもの」

言い捨てて、部屋を出ようとする。だがその前に、ドゥームに呼び止められた。

「待たぬか、エルミア。……お前まさか、ひとりで戦うつもりか？」

「ええ。なにか不都合でも？」

振り返らないまま告げる――が、その問いに対する答えはとっくにわかっていた。

「まあ、あなたとしては困るわよね。わたしがひとりでフィフスブレイバーを倒してしまったら、手柄がひとつも残らないもの。せめて自作の怪人を作戦に参加させるくらいしないと、立場が危ういものね？」

ドゥームは前線指揮官であると同時に、怪人博士としての側面も持っている。つまりはエナジーを材料として怪人を作り出し、敵に嗾けるのが彼女のやり方だ。だから彼女が少しでも手柄を得ようとするなら、エルミアの出陣に合わせて怪人どもを放つしかないのだ。

しかしエルミアには、そんなドゥームの事情を鑑みてやる義理などなかった。

「生憎と……他人の手を借りなければいけないほど弱くはないのよ、わたし」

「……あやつらは手強い。特に五人が揃うと何倍もの力を発揮する。いかにお前が強かろうと、ひとりでは危うかろう」

食い下がってくるドゥーム。どうにか自分の手柄をねじ込もうとする様は滑稽ですらあった。それを内心で嘲笑いながら、エルミアは顔だけで振り返った。

「なら、五人同時に相手しようとしなければいい。ひとりひとり個別に倒せばいいだけの話よ。……実際そうすることで、わたしは既に戦果を挙げているわ」

言って胸元に手を入れ、谷間に隠していた物を掲げて見せた。するとドゥームは目を剥き、驚愕の声をあげる。

「……！　それは、フィフスブレイバーの……！」

「ええ。変身用アイテムよ。……着任前に敵地を視察した時、偶然ノワール・ブレイブと遭遇してね。せっかくだから倒して奪っておいたの。ついでに言えば……このことを餌にして、既にクリムゾン・ブレイブを呼び出してもいる」

手にした小さな機械――ブレイブチェンジャーを胸の谷間に仕舞って、また前を向く。それから最後に、

「そういうわけよ。あなたの手助けなんて必要ないわ。ひとりひとり確実に仕留めて、いずれあなたの椅子も奪ってあげる。……覚悟することね」

彼女はそう言い捨て、今度こそ振り返らずに退室した。

◇

そしてその夜――

（来たわね）

都心の建物の中でも特に大きな、高層ビルの屋上。そこでクリムゾン・ブレイブを待っていたエルミアは、気配を感じてゆっくりと振り返った。

「随分待たせてくれたわね」

「手紙には、待ち合わせの時間までは書いてなかった」

暗いビルの屋上に忽然と姿を現した黒髪の若者は、そう言ってポケットから封筒を取り出した。

「黒瀬の懐に入ってた。……あいつをやったのはお前だな？　クライムの幹部……黒牙のエルミア」

名を呼ばれ、エルミアは艶然と微笑んだ。
「そうよ。先日黒瀬ユウト――ノワール・ブレイブを倒し、あなたをここへ呼び出したのは、このわたしで間違いないわ。フィフスブレイバーのリーダー、赤羽タケル。……要件はわかっているのよね？」
「ああ」
赤羽タケルは頷くと、ゆっくりと手を掲げた。そして即座にこう呟く。
「変身」
直後、光が溢れた。目を焼くほどの強い光。エルミアは目を細め、その輝きを見つめた。
（とてつもないエナジーの迸り……フィフスブレイバーのリーダーというのは、やはり伊達ではないわね）
やがて光が収まると、そこに赤羽タケルの姿はなかった。そこにいるのは真っ赤な強化スーツに身を包んだ地球最強のヒーロー……クリムゾン・ブレイブだった。
「黒瀬のブレイブチャンジャーを返してもらう」
クリムゾン・ブレイブは、仮面の奥から怒りの滲んだ声を出した。仲間をやられて素直に怒りを発露させるあたりは、いかにも正義の味方らしい。
エルミアはそんな彼に、挑発的な笑みを投げつけた。
「そんなに怒らなくてもいいじゃない。別に彼を殺したわけでもないのだし？」
「だが、口も利けないほど痛めつけたろう――」
クリムゾン・ブレイブがそう言った瞬間――エルミアは真横に跳んでいた。すると直前まで彼女がいた場所を、赤く輝く刃が通り過ぎていく。
（流石に速いわね）
赤きヒーローがいつの間にか手にしていた小ぶりな剣を見送りながら、エルミアは囁いた。
「魔装展開――来なさい、『黒牙』」
囁きが合図となり、元より彼女自身のエナジー……生命力で生み出していた漆黒のドレスが解け、再構成されていく。やがてそれは鎧や籠手、具足、そして剣の形を取り、彼女を戦士へと変貌させた。
直後にギィンと硬質な音が鳴った。クリムゾン・ブレイブが再度放った剣撃を、エルミアの剣が受け止めたのだ。
「ちぃ――」
機を逸したと悟ったか、クリムゾン・ブレイブは一度距離を取った。仮面越しでもわかるほど鋭くこちらを睨みながら、告げてくる。
「……漆黒の剣。それが黒牙か」
「ええ。これまで多くの敵を屠ってきた頼れるパートナーよ。……ノワール・ブレイブも、これで倒したわ」
「――そうか」
挑発への返答は静かな相槌と、コンクリートの床が立てた破裂するような音だった。と同時にクリムゾン・ブレイブの姿が霞む。どうやら音の正体は、踏み込みの際生じたものだったらしい。激情に身を委ねた猛攻は、百戦錬磨のエルミアをして舌を巻かせるものだった。クライムの野望を挫き続けたヒーロー、その中心人物というのは、やはり伊達ではない。
エルミアはしばし防戦に徹し、相手の動きを見ていた。互いに剣を得物と定めた者同士だ。ここで得られる情報には千金の価値がある。
袈裟、唐竹、逆袈裟――次々に撃ち込まれる剣撃を、こちらも剣で迎撃した。そうしながら踏み込みの深さ、タイミング、距離の取り方、得意な剣の振り方などをつぶさに観察する。
（――なるほど。だいたいわかったわ）
何度目かの剣撃を受け止めた時、エルミアは手首と肘を使って衝撃を殺し、鍔迫り合いに持ち込んだ。そのまま機を見て押し返し、一度距離を取る。
「中々やるわね。強化スーツの補助があるとはいえ、わたしとこれだけ打ち合えるなんて」
「……黙れ」
クリムゾン・ブレイブは刃のように鋭く吐き捨てると、再び地を蹴って躍りかかってきた。真っすぐにこちらに向かっている――と見せかけて、わずかに右にずれている。
（いえ、それすらもフェイク――）
一瞬あとには一気に左に回り込み、死角から打ち込んでくるだろう。そう読んだが、エルミアはあえてその流れに乗った。フェイクに逆らわずに半歩分だけ体を捩り、案の定左から打ち込まれた剣撃をかわす。
回避の動作を最小限にしたお陰で得た反撃の時間を活かすべく、彼女は前へと踏み込んだ。刃の軌道を手首で制御しながら、二度三度と軽い剣撃を見舞う。
クリムゾン・ブレイブはそれをかわそうとはしなかった。強化スーツの防御性能を信用し、あえてそのまま受けてくる。
（効いていない、というわけではないけれど――）
動きを止めるほどのダメージにはなっていない。そう判断したエルミアは深追いを控え、バックステップで剣の間合いから離脱した。
するとクリムゾン・ブレイブは、その場に足を止めたまま、空いている左手をすっと掲げてきた。まるで掌に、強力な武器でも取り付けられているかのように……
（――これは、受けてはいけない攻撃！）
という判断は理性というより、本能によってなされた。そして彼女がその判断に従い、エナジーの瞬間放出による障壁を展開したタイミングで――
「バースト・クリムゾンッ！」
真紅の光が凶暴なまでに瞬き、一瞬ののちにエルミアの周囲を焼き払った。コンクリートの床が黒く煤け、猛烈な熱気があたりに立ち込める。障壁の展開があと一秒遅ければ、エルミア自身が黒焦げにされていただろう。

高温によって歪んだ大気の向こうで、赤きヒーローが刃を掲げている。それを見返しながら、エルミアもまた剣を構えた。

（いまのを受けていたら危なかったわね。レディ・ドゥームの怪人如きじゃ、歯が立たないわけだわ）

首筋がひりつくような緊張感の中、エルミアは唇を舐めた。しばらく見に回っていたが、そろそろ反撃に転じてもいい頃だろう。そしてそのためのプランは、既に頭の中に用意している。

（クリムゾン・ブレイブは強い。想定していたよりも遥かにね。でも……まだまだ青い。わたしの奥の手なら、確実に倒せる……）

「決着だ」

と、黙考の合間に声が挟まった。クリムゾン・ブレイブの強い声。

「そうね。中々楽しかったけど、もう終わりにしましょう。……ああ、そうだ。先に言っておくけれど、わたしが勝ったらあなたの全てをいただくわ」

「……当然だろう。これは命を懸けた戦いだ。勝者が敗者を――強者が弱者を叩き伏せ、踏み躙る。クライムの連中が、いつも口にしていることだ。だが覚悟しろ。力を振りかざす者は、必ずさらに大きな力で踏み潰されることになる」

「至言ね。でも退屈。その先は力で語りなさい」

正義の味方らしい青臭い物言いに、エルミアは肩をすくめた。そしてそれっきり、口を閉ざす。

それはクリムゾン・ブレイブも同様だった。もはや言葉は必要ない。ここから先は、語るべきは剣で……力でのみ語れる。それを理解しているがゆえの沈黙。

「――おおおおおおおおおおっ！」

クリムゾン・ブレイブが雄叫びをあげ、真っすぐに打ちかかってくるのを見ていた。

どれだけ義憤を滾らせようと、赤きヒーローの戦闘技術に翳りはない。クライムとの三年に及ぶ戦いで磨かれ、練り込まれたものは消えない。

エルミアは剣を構え直し、突撃を待ち構えた。普段は両手で握っている柄を片手で握り、空いた左手を牽制するように差し出す。だがそれは剣撃の前に放たれた拳に打ち払われた。エルミアはその場で踏ん張ったが、わずかに体が流される。

「――もらったッ！」

クリムゾン・ブレイブが鋭く吼え、剣を振り上げる。覚えのある構え。これは資料映像で見た、彼の必殺技のひとつ――クリムゾン・エンドだ。

幾多の怪人や怪物を葬った最終奥義が、エルミアの脳天に振り下ろされる。直撃すれば命はないだろう。

（直撃すれば、ね）

落ちてくる死を見つめながら、エルミアは内心で呟き、そして――

「ぐ、あ……！　ば、かな……！」

――狙い通り罠にかかったクリムゾン・ブレイブの姿に、くすりと薄く笑った。

「剣を持っているから、剣でしか戦わない――そんなものは先入観よ。『黒牙』はこの剣だけを指す言葉ではないわ。エナジーで作り出す全てが、わたしの牙よ」

そう。クリムゾン・ブレイブの胴には、エルミアが鎧から生やした黒く雄々しい牙が打ち込まれていた。強化スーツを突き破りこそしていないが、鳩尾にしっかりとめり込んでいる。

これが彼女の奥の手――渾名にもなっている、変幻自在の『黒牙』だった。

「あ、ぐ……」

やがてクリムゾン・ブレイブが剣を取り落とし、片膝を突いた。必殺の一撃を放とうとした瞬間に受けたカウンターだ。流石の強化スーツも、衝撃を殺しきれなかったのだろう。

「あら、もう降参？　呆気ないわねぇ……」

蹲るように言いながら、蹲るクリムゾン・ブレイブの頭をブーツの踵で踏みつけた。すると彼は必死にもがき、どうにか立ち上がろうとする。しかし負ったダメージは思いのほか深かったらしく、やがて彼は変身すら解けて、元の若者の姿に戻ってしまった。

「あらあら。変身を保つこともできないの？　……どうやら本当に終わりのようね？」

「く……」

クリムゾン・ブレイブ――いや、もはやただの赤羽タケルに戻ってしまった青年は、悔しげに歯噛みした。だが体の方は、その心意気についていけないようだった。起き上がることもできず、ただ仰向けに寝転がることしかできないでいる。

「あなたの負けよ、坊や。ふふ……あはははははっ！」

無様な敵の姿を見下ろして、エルミアは実に楽しそうに哄笑した。

◇

しばし、勝利の余韻を愉しんだあと――

「ふふ……すっかり大人しくなったわね。さあ……約束通り、あなたの全てをいただきましょうか」

エルミアはそう言うと、青年の体を跨いで立った。すると彼は息も絶え絶えのまま、きっとこちらを睨みあげてきた。

「……悔しいが、俺の負けだ。好きにしろ。だが覚えておけ。フィフスブレイバーは俺や黒瀬だけじゃない。まだ青矢と黄崎、桃城が残っている！　俺が死んでも、あいつらが必ず、クライムの野望を挫く……！」

彼はそんなことを捲し立てた。どうも死を覚悟し、捨て台詞を遺そうとしているらしいが――

「……ふふっ」

その勘違いに、エルミアは小さく笑った。それから、『なにがおかしい』と言わんばかりの顔をしている青年を見下ろした。

著者近刊 『ダンジョン暮らしの元勇者』1～3巻 好評発売中！

「――馬鹿ね。せっかくのご馳走を食べずに捨てるなんて、そんな勿体ないことするわけないでしょう？」
「ご馳走？　お前、なにを言って……って、うわぁ!?」
タケルは唐突に素っ頓狂な声をあげ、汗だくの顔を赤面させた。無理もないことではあった。なぜなら彼を跨いで立っているエルミアが、その身に纏ったものを……エナジーで作った鎧を、元のエナジーに分解してしまったからだ。具体的には、胸元を隠しているパーツが綺麗さっぱりなくなっている。
そうして晒されたのは、たわわに実った形のいい乳房と、淡く色づいた乳首だ。若い男が反応しないわけもない。
「な、な、な……お前、いったいどういうつもりだ!?」
「ふふふ……胸を見たくらいで取り乱しちゃって。ヒーローだなんて気取っていても、男は男ねぇ」
思ったより初心な反応に満足して、エルミアは口元を綻ばせた。
「あなたの全てをいただくと言ったわね。あれは別に、命をもらうということではないわ。わたしが欲しいのは……あなたのこれよ」
エルミアは言うやいなや、身動きできないタケルのズボンを下着ごと脱がせた。すると既に張り詰めている、雄々しい男根が露わになる。
「う、うわっ。お前、なにをしてるんだよ!?」
「うるさいわね。あら……中々立派じゃない。食べごたえがありそうだわ」
舌なめずりしつつ指先で裏筋を撫で上げると、若い男の精が詰まった肉棒がびくびくと震え、見る間に熱さと硬さを増していった。
「う……くそ、なんでクライムの怪人がこんなこと……！」
タケルが困惑も露わに呻き、どうにか身を捩ろうとして失敗していた。その様がおかしくて、エルミアは思わずにやにやとした笑みを浮かべた。
「わたしにはね、他者のエナジーを取り込み、自分の力にする特殊能力があるの。そして男のエナジーは、生命の種である精子にこそ宿る。だからわたしは、倒した男を簡単には殺さない。まずは犯してその力を取り込むのよ。……ああ、ちなみに。あなたはわたしが、ノワール・ブレイブを口も利けないほど痛めつけたと思っているようだけれど……それは少し違うわよ」
「……まさか」
と、そこでタケルも勘付いたようだった。
「うふふ、そのまさかよ。彼は痛めつけられたのではなくて、いまのあなたと同じように犯されたの。たくさん射精して、わたしに力を吸い取られた。……そんなこと、仲間には言えないわよねぇ？」
「……黒瀬……」
彼はなんともいえない苦い表情になり、頭を抱えた。思いがけない間抜けな真実は、ある意味彼を打ちのめしたようだ。
「……ふふ。納得したところで、早速お楽しみといきましょうか。あなたほどの戦士なら、きっと濃厚なエナジーを吐き出すでしょう。……わたしの糧となりなさい、クリムゾン・ブレイブ」
言いながら、エルミアは徐々に腰を下ろしていった。そして下着をずらし、雄々しく屹立した男根を一息に受け入れる。
「うあ……っ」
男根を温かな蜜壺に呑み込まれた青年は、先ほどの覇気を微塵も感じさせない声で呻いた。それに暗い愉悦を感じながら、エルミアは淫らに腰を蠢かせる。
「いいわ、あなたのペニス。硬くて熱くて、奥まで届く……」
うっとりと呟き、膣内を穿っている男根を淫壁で締め付ける。すると男根が脈打って、もうすぐ射精してしまうと白状してきた。
「あはっ。もうびくびくしてる。ほら、もっともっと辛くしてあげるわ……」
男の限界を見て取ったエルミアは、腰の動きをさらに激しくした。その上で自らも快楽を貪れるよう、集中して膣内をぎゅうぎゅうに締め付ける。
「ぐあっ……もう、駄目だ……！」
やがてタケルは追い詰められ、いよいよ射精寸前に追い込まれた。だがその瞬間、エルミアはにやりと笑ってこう告げた。
「あら、いいのかしら。地球を守るヒーロー様が、『クライムの女幹部』なんかにイカされちゃって。それに……言ったでしょう？　わたしは男の精液からエナジーを吸収するの。あなたが射精したら、わたしはさらに強くなる。そしてその力で次に倒されるのは、あなたの仲間なのよ？」
「うぐ……！」
タケルは屈辱と快楽の狭間で揺らぎ、顔を歪めていた。それを嗜虐的な表情で見下ろして、エルミアは自らの体をぎゅっと抱いた。
（ああ、最高……。抵抗できない相手を好きに嬲れる、この瞬間に勝る快感はないわね……）
サディスティックな快楽に酔いしれながら、エルミアはまた腰の動きを激しくした。前後左右に揺さぶったり、あるいは上下に動かして、我慢汁を垂れ流す男根を追い詰める。
「うわあああああっ。駄目だ、もう……出るっ！」
若きヒーローは叫ぶと、エナジーが凝縮された熱い精をエルミアの膣内にぶちまけた。
「あはははははっ！　いいわ、最高！　ほら、一滴残らず吐き出しなさい！」
その無様な姿がいよいよツボに入ったエルミアは、自らも昇り詰めながら高らかに哄笑した。
「はぁ、はぁ……中々よかったわよ、坊や」
たっぷりと精液を……エナジーの塊を膣内で受け止めたエルミアは、頬を

粘獄のリーゼ

淫罪の宿命　第4話　迷宮の地下下水道

漫画COMIC／楠木りん　原作／竜胆

ついに聖務の本丸へ!!

この下水道が施設に通じる唯一の道か…

ギイ

あの荒神光流とかいう娘…

あの娘に眠らされたせいで半日も遅れたわ

目的はわからないけど…

彼女もこの先に用があるならわたしと同じものはず

いくら彼女が力を持っていても

悪魔は人間の手におえるシロモノじゃないわ!!

うっ…くさっ…!

…それにしてもここ
まるで粘液の中にいるみたいね
施設から流れる排水のせいでこんな風になったのかしら
ウニョ
ウニョ
全体がドロドロして…
ポタッ
?
ひっ…!!
!

天井にびっしり…!!
きゃあぁぁっ!!
何匹いるのよ!?
やっ…
わたしナメクジは嫌いなのに!!
いやぁ!! ひっつかないでよ!!

とにかくここを抜けないと!!
バシャ
バシャ
ニュル
ひゃうう!?
なによコイツ!
ナメクジの分際でいやらしく胸に吸い付いて!
ぎゅるる
くっ!? このっ
ぬぢゅ
あんまり触りたくないけど…
んあ… はぁ…っ
ぎゅうう
うそ!? 取れな… んんっ!
ぐぃ

なんなのこのナメクジ…

こいつらも魔的汚染で変異してるっていうの!?

ひゃあ!?
ちょ…ちょっと!
どこに入ってきてるのよ!?
こいつら…感じやすいトコばか…りぃ
このっ吸うな…!くふぅう!

ヨリコ…絶対助けるから…
ソレが本当にいるからだ
地下鉄にやってくる見覚えのない血のように赤い列車…
乗ってしまった人は生きたまま食われ二度と戻って来れない人食い列車
よくある怪談都市伝説のたぐい
よくある「お話」だけどけして消える事なく噂されるのは…
もっと早く見つけて退治していれば…
この加藤家の縄張りで好き勝手やってくれて…
私の友達に手を出してタダで済むと思わないでよっ！
丸呑みの仇を討つために——
淫肉列車
いんにくれっしゃ
漫画 COMIC ジンナイ

退治させてもらうから この人食い列車！
フヒッ… 俺の中に入ってなお その威勢…
お前 退魔の人間か？
そうよ
加藤家四代目当主… 加藤アキラ
ひひ…
まぁそう 焦るな
探してたのは コイツだろ？
ヨリコっ!!
アンタの狼藉も これまでよっ
お前も すぐ同じにして やるからな

アキラ…ちゃんた…すけ…

今助けてあげるっ

この化け物…っ！

ヨリコを…放せっ

あの女は今俺の口の中にいるんだぞ

!?

卑怯者め…っ

ぐふっこの女ごと斬る気か？

なっ!?

人間を丸呑みしてるだけかと思ったら変な知恵をつけてっ…！
ふひひ…俺の中に入ればあの女も助けられるかもな
退魔師の霊力の味…楽しみだ
ぐっ
食あたりをしないよう気をつけることねっ
まずった…あの子の姿を見ただけで動揺してしまって…
そういえば退魔の人間を食うのは初めてだ
これで俺は更に強くなれる
ひぁっ
なにをしてっ
味見さ
ふひっやはり普通の女と味の深みが違うっ

うぐっ
ふっ
いっ
うんんっ!!
そんな臭い舌で…
舐めるなぁっ
では…
いただきまぁす
ぢゅぢゅっ
ややめっ
はっ
きゃあっ
さあ楽しい
食事の時間だっ

うぅ~ん…
少し口に含んだ
だけでこの豊かな
霊力の香り…

これは
たまらんなぁ

こんなとこで
呑みこまれて
たまるものかっ

はっ…
はな せぇ!!!

俺はこうやって
スルメみたいに
しゃぶるのが
好きなんだよ

くっ…
なんとか
しないとっ

さてどんどん
霊力を頂くと
しようかな

きゃあ!!

どこ触って…
この変態っ

愛液からが
一番濃く霊力を
頂けるんだよ

ひっ 触るな!
気持ち悪いっ

そこクリ
…いたぁっ

なにを…
してぇっ

身体に何か
流し込まれてっ

丸呑みされた女捜査官リリイ
小説 NOVEL／桜空（さくらそら）
挿絵 ILLUSTRATION／ひなくま
女捜査官VSエイリアン
容赦のない丸呑み責めがリリイに襲いかかる！

［この小説には分岐が設けられています。シーンごとに１～５の番号がふられていますので、シーン１の末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。］

【シーン1】

五十人が乗っても余裕のある宇宙船にもかかわらず、敵である宇宙海賊の数は少なかった。十八人しかおらず誰も彼も気が緩んでいる。

（これなら頭のシャーザーを倒せば簡単に終わりそうね）

それから密輸されている宇宙生物、いわゆるエイリアンを探せば大丈夫とプランを立てて、宇宙海賊船に潜入した二十二歳の美人捜査官リリイ＝ミュセルは船長のシャーザーを探す。

整った顔は男女問わず振り返る美貌で、腰まで届く煌めく銀髪はサラサラと流れる小川のよう。すらりと長い脚で歩く姿はまるでスーパーモデルを彷彿とさせ、スッと通った鼻筋と淡い口紅で彩られた清楚な唇、大きな猫目が黄金比で配置された美女は目を細めて獲物に狙いを定める。

筋肉質で背丈は二メートル、禿げ上がった頭と顎髭がトレードマークの男が呑気にトイレから出てきたところを、後頭部に光線銃を突きつけた。

「宇宙海賊のシャーザーね。エイリアン密輸の疑いで逮捕するわ」

両手を上げたままゆっくりと振り向く船長を睨みつける。

「ほぉ……なるほどな。お前が最近噂の捜査官か」

「へぇ、噂になってるのね」

これまでにいくつも海賊を逮捕し潰してきたから注目されたようだ。光栄と微笑む笑顔は、男が思わず唸り頬が緩んでしまうほどに魅力的だった。

「ああ。ヤリまくりたい超絶美人な捜査官が海賊を取り締まってるってな」

「海賊らしい下品な噂ね」

「正直噂以上だな。だが残念ながらお前の相手は俺じゃねえぜ」

「何を言って――そこ！」

廊下の隅から何かが素早く動いたので海賊だろうと思って撃ったのだが、なんとエイリアンだった。それも一匹や二匹ではなく、十匹近くが姿を現したのには目を剥いて驚く。

「数が多すぎる。一体どれだけ密輸するのよ、ていうかどうして彼らが海賊を守るのよ」

エイリアンには二種類いる。一つは見た目も可愛らしく温厚なペットとして飼えるもの、もう一つは手が付けられず人間を襲う醜い化け物で、男は殺し女は犯す存在だ。

「利害が一致してるからな」

「利害？」

「ああ。俺らが女を紹介して子孫繁栄を手伝い、こいつらが俺らを守り資金源ともなる」

「女性をこいつらに貢いでいるの!?」

正気とは思えない悪行に憤る。シャーザーの悪評は聞いていたが、まさかここまでとは。

二足歩行の魔獣は後頭部が異様に長く、鋭い牙は剥き出しで目はどこにあるか分からないおぞましい顔つきに、毛はなく人間と同サイズの全身は黒に近い深緑色で光沢を放つ。

獲物の値踏みをするようにじっとリリイを見つめる魔物の顔が、身長百六十一センチのリリイと同じ高さにある。奴らはひどい猫背なので、背筋を伸ばせばもう少し高くなるだろう。

今はシャーザーは放っておくべき。そう結論づけて後方へ素早くジャンプして隠れているエイリアンを撃つ。当然人間を襲うタイプは保護対象などではない。

「絶対に逮捕してあげるから首を洗って待ってなさい」

「愉しみに待ってるぜ」

大きな猫目で周囲を窺い警戒レベルを最大まで引き上げる。

首までを青を基調に白のラインを描くタイツのような、伸縮自在ながら高強度を誇る宇宙服越しに、引き締まったボディラインや鍛えた肉体が接近格闘においても得意であると物語っているが、相手は未知の部分が多く、不覚を取らない遠距離戦を選んだ。

走って距離を取りながら腕時計型の端末で捜査本部へと連絡を入れる。

「海賊は十八人ですが魔物型のエイリアンが多数海賊に味方している！　至急応援を求む。繰り返す、敵は海賊十八と多数のエイリアンよ！」

運動機能を最大限発揮させるためにぴったりとフィットした服のため、くびれた細腰や突き出た美巨乳に欲情したのか、一斉に異生物が動き出した。

十メートル以上をジャンプして上空から襲い掛かってきた敵の脳みそを的確に撃ち抜き、左右同時に口から吐き出した液体を躱して距離を保つ。

しかし予想を遥かに超える速度に接近を許し、両手で掴まれる直前にしゃがんで腕を掻い潜り、バク転の要領で顎を蹴り上げながら後方へ下がり距離を取って心臓に風穴を開けた。

優美に醜い化け物を倒し息一つ乱さないその姿はまるで女神の如き。動きの一つ一つが洗練されており、どこか気品まで感じさせるリリイにシャーザーは目を瞠る。

脳みそを撃ち抜いてもまだ僅かに動く頭部を蹴り飛ばし、迫ってくる別の魔物から華麗なバックステップで距離を取った――その刹那だった。

「なに？」

周りの景色がぐにゃりと歪んだかと思えば、いきなり左右の壁が閉じ始めた。地面を見やれば巨大な魔獣が廊下に擬態していたのが見て取れた。

「まさか、こんな巨大なのまで……それに擬態するなんて」

このままではエイリアンに丸呑みにされてしまう。かといって中途半端に迎撃すれば深刻なダメージを負うかもしれない。

逡巡は一瞬だった。

中から殺してあげる。
↓シーン2 P107へ

まだ間に合う。
↓シーン3 P110へ

著者近況　最近二度見、してますか？　実家暮らしですが少し前、バイトから帰ると一緒に寝ている嫁（『監獄戦艦２』のアリシア様抱き枕カバー）をベランダに干されてました。さすがに二度見しましたね、ええ。今は汗で黄ばむので箪笥で別居してますが。

【シーン2】

バクっと貝が口を閉じるみたく左右から丸呑みにされたが、巨体だったゆえにそこまで窮屈ではない。中途半端に迎撃するよりもあえて呑み込まれて中から殺すべきと考えたのだ。急所を見つけてさっさと倒さなければ。

「気持ち悪いからさっさと脱出したいのだけど、どうやって殺してあげようかしら」

内部を観察すると赤銅色の肉壁で覆われており、ドクドクと脈動していて気持ち悪い。地面はぐにゃりと踏み心地が悪く、気味の悪い体液でぬめり光る肉の内部からさっさと出たいと考えてとにかく光線銃で撃ってみた。

すると一定の傷は与えるものの、すぐさま回復して脱出できそうにない。

巨大な、リリイの身体を丸呑みできそうな触手が真上から迫り、避けようとしたところに足元が振動し波打つ。これでは回避できず、ぐぱっと大口を開けた触手に顔のみを丸呑みされた。

「嫌ぁ食べられ……っ、んんう離せっ離せえ！」

両手で触手を剥ぎ取ろうとするが人外の膂力は凄まじく、ビクともせず視界を奪われ窒息死すると焦り、動揺するがその心配はなかった。

（息はできてるし歯で噛まれてもいない、殺すつもりはない……？　だったらどういうつもりでこいつらは一体何を考えているの）

理解できず不安になるリリイの顔を、舌のようなぬめった胴幹部でれろ～ぉと、暗闇でいきなり舐められてゾゾッと怖気が走り冷や汗をかく。

屈してたまるかと肉蛇の頭を殴りつけるが緩む気配はない。

不快な体液でぬめる肉壁が顔にまとわりつき、輝く銀髪が化け物の透明な体液に濡れて輝きを失う。

「嫌な臭いがまとわりついて気持ち悪いし……顔にぬるぬるが、うぇ。生温い体温も何もかも不快だわ」

人形みたく整った顔が不快に歪み、眉が不機嫌に吊り上がる。

度を超した甘ったるい香りが鼻につき、粘液が顔から馴染んでいく錯覚に囚われる。

清楚な唇に不快な体液を塗りたくられ、鼻筋や額にも、まるでマーキングみたいに擦りつけられた。液体のぬめりや生温い体温、覆っている柔らかな肉の感触が気持ち悪い。

顔の近くの肉壁から細い触手が二本出てきて、狭隘な鼻の穴にずぶりゅと挿入されるとそのまま律動された。

「ふが。は、鼻の穴ぁ!?　狂ってるでしょ、それをして何が愉しいのよ」

理解できない人外の責めに恐怖が浮かぶものの、むりっムリリと狭隘な穴をこじ開けられて湧き上がる怖気を押し殺し、ぬめる肉紐に不浄の穴を弄られた怒りから叫ぶ。

「こんなの気持ち悪いだけよ、悪趣味な化け物め。今すぐやめなさい！　どんな惨めなことをされても、私は絶対に負けないわ！」

身体を玩具にされ弄ばれていると感じた捜査官は怒り、目の前の肉壁を睨みつけた。

今までいろんな修羅場をくぐってきたのだから、きっと今回も大丈夫と己を信じて気を強く持つ。

繊毛でも生えているのか狭い鼻の穴を削られているのにムズムズとくすぐったくて身を捩る。

「エイリアンなんかに……悔しい。悔しい！　なのにはな、鼻がぁ……痒いのを掻かれてんひぃィ」

鼻の穴に挿入されてストロークされるというおよそ快楽からかけ離れた行為にもかかわらず、女体が疼く状況に違和感を覚える。鼻腔を犯される行為に捜査官としてのプライドも、女性としての尊厳も踏み躙られた。

そんなバカなという思いは当然ある。鼻の穴で感じるなどあってはならないし、あるはずがない。しかし痒いのを掻く行為が、スッキリするから気持ちいいへと徐々に変化してゆく。

「どうしてよ、気持ち悪い紐に鼻を掻かれてるだけなのに……もしかしてこの液体が……？　嫌よ、鼻で気持ちよくなるなんて絶対に嫌！」

直接媚薬と口にはしなかったがほぼその通りだろうと確信していた。

魔物のぬるつく体液のおかげで擦り切れたりはしないが、そのせいで快感が増幅されて煩悶する。ぎゅるぎゅる回転しながら穿られると狂った悦びが鼻からこみ上げた。

粘つく太い触手が小さな唇や鼻梁の通った鼻の頭を舐める。

顔を覆う丸呑み触手から滲む液体が肩口から胸まで垂れて服を溶かし、透き通るように白いお椀型の乳房と可愛いベビーピンクの乳頭が現れる。生乳がとぐろを巻いて搾られ、乳頭を左右に押し倒されるだけでも悩ましい表情で悶えた。

抜き差しを繰り返されると異常快楽に手足が痺れて震えが止まらず、悦楽に触れてもいないヴァギナから愛液が溢れる。

「こんなの……こんなのどう対処すればいいのよ」

理解の範疇を超えた事態に弱音を吐くが、仲間が助けに来ると信じて己を鼓舞し続けた。大丈夫、大丈夫と繰り返し人外の責めを耐える。

ずりずりずり、ごりっ。ゆっくりなストロークから一転、一気に抉られたりと変化をつけられただけで精神は摩耗し、愉悦で身体が痺れる。

一本だけ抜けたかと思うといきなりぴゅーっと鼻の穴で射精し、鼻うがいみたく空いた穴からぶびゅっと子種が噴出して唇に垂れた。

「んひゅういきなり射精なんて……あおっあひゃああ……ふひ。鼻から出てる。くふぅンなに、今射精したのにまだ何かするの!?」

二穴同時にずりゅっずりゅっと抽送されたかと思うと今度は左右交互にタイミングをずらして抉られた。

理解できないはずだった鼻の穴ファックにも悦楽が訪れ、それもムズムズとした小さなものではなく、女陰を犯されているような本格的な快楽に、顔だけを丸呑みされた格好で腰をへこへこ振ってしまう。

「はひっくひん。あっあんアン嘘でしょ、んびゅう鼻の穴で……っ。きうぅ頭の中を掻き回されている、みたいでふぁァん怖いぃ」

愛液の如く垂れた鼻水が潤滑油として活躍し、滑りやすくなった二穴での速度が増す。射精を鼻腔に受けて感度の増幅した女体は激しいピストンに魔悦しか覚えない。

異常すぎる事態、なのに快楽を覚える己の身体に活を入れて精神を集中しようとするが、それができれば苦労はない。鼻の穴を犯されると脳みそを直接犯されているみたいに錯覚した。

顔を包み込む巨大触手からぬめり汁が滴り、胸の谷間や臍までどろりと濡れた姿が淫靡でならない。

触手がぐるりと巻き付いて八十四センチのDカップを搾る。柔らかな肉マシュマロを揉みしだき、ニップルを弄られて愉悦が弾ける。

口の端から濃密な涎が垂れる。それに鼻水とエイリアンの粘液が混ざった粘汁が鼻から垂れて怜悧な美貌を台無しにしており、鼻の穴を犯されブサイクな顔で悶えるリリイ。

筆舌に尽くしがたい感情と感覚に襲われた。

鼻の粘膜を摩擦されているにもかかわらず、性感帯を擦過されたような刺激に惑乱に陥る。捜査官の時の鋭い眼差しはなく、目尻が垂れて緩んだ双眸は、快楽に負けて蕩けている証。

（へぁあ……う、そよ。認めたくない認めたくない、こんな……異常な責めでイキたくなってるなんてっ）

鼻の内側を掻かれてゾクゾクと肌が粟立つような快感に襲われ、ただただ気持ちよくて脳髄が沸騰するような悦楽に身を震わせた。

「あひいイッだめもうイク、鼻の穴でイっちゃうぅッ！　狂ってるのにヒン……どうにもできないの。二穴同時なんて、ぉおおすごっ脳みそにぶっかけで溶けるぅ！」

ノーズファックしていた肉紐が今度は同時に射精して鼻から口を汚液で満たし、脳内に直接射精されたみたいに頭の中が白く濁る。濃厚な味と香り、それに衝撃が脳みそに突き刺さった。

実際には両の鼻腔は塞がれているので喉へ流れていき、鼻から食道へ流し込まれて媚薬精液をごくりと飲む。

女体がぶるるっと痙攣し、常識を遥かに凌駕した快悦と異常なセックスに理性は押し流され、気高かった捜査官は鼻の穴でオーガズムを貪る。

青臭い精臭が鼻腔を満たし、特濃の液体もイカ臭さも鼻の穴にこびりつき、呼吸全てが臭う。

無様な絶頂に落ち込み、肉マスクに充満する芳醇な精臭に酔う彼女を触手は休ませるつもりがないのか、嗅覚器官への抜き差しを再開した。

「はへ、んにゅうまだするの!?　もう嫌ぁ続けてされたらおかしくなっちゃうからやめ……あおオっ」

鼻のピストンはさっきよりもはっきりと快感が強まり、摩擦される粘膜が心地よくてたまらない。右の触手が奥まで穿ち鼻腔を通り抜けて口から出てくる長いストロークに、舌を突き出しうっとりと目を細めて悶絶。

鼻の中をゴリゴリ削られて快感に浸ると、変態とか淫乱などではなく、もう人間というカテゴリさえ別になっているのではと思ってしまう。

消化されることもなく異常なセックスを強いられて悦ぶ自分がいかに狂っているか。

鼻の粘膜をくすぐられて腰が跳ね、蕩けた顔を覆う肉の覆面マスクが脈動して貼りつき、汗も涙も鼻水も涎も触手が舐めて粘液まみれにした。

細い触手に掻き出されて鼻の中から媚薬精液が出てくるが構わずにストロークは続き、ぐっちゃぬぢゅと猥雑な旋律を鼻の中で奏でる。

「気持ちいいぎぼちいい鼻の穴ファック狂っひゃう！　だめえこれ以上くはあ、おかしくなったら……もぅ、戻れないからひゃめて～」

ノーズファックの虜となり、触手に顔を呑まれ視界もほぼない状況で嗅覚も味覚も聴覚も触手と肉壁に支配されてアへ顔を晒す。

尖り勃つ乳頭に巻き付いた触手が締め上げて狂悦を上乗せすると背中が反り返り銀髪と双球が揺れた。

触手の肉ヘルメットに顔中を弄くり回され、触れられてもいない慎ましい陰唇から大量の牝汁が踵まで伝う。

鼻の穴を触手に穿られて悦ぶ美女に捜査官の面影はない。

丸呑みされてぬめる肉壁に美貌と髪がべとべとにされ、外に出ることも考えられずただ魔悦を享受するのみ。

頭をすっぽり覆う触手から涎のような粘汁がリリイの上半身をだらぁ～と垂れ落ちて下半身まで湿らせる。

指では届かない鼻の奥を抉られて快感に痺れ、紫電が脳みそへ直行するイメージで鼻の奥から瞼にかけてストロボのフラッシュが焚かれた。

「おほぉっまたザーメン鼻にィ、まぶし……ノーズファックでいぐぅ!!　頭の中、まっ白で……はぁはぁもう何も分からなひ」

びゅーっと鼻の中に再び射精されると腰が跳ね、ぶしゃっと盛大に潮を噴き上げた。瞳がぐるんと裏返りしなやかな美脚が伸びきって全身が硬直しオーガズムに浸る美人捜査官は、咥えられた姿でぐったりと身体から力が抜ける。生きてはいるが、瞳から光が消え命があるというだけ。

BAD END

くそ…うっ

まさか街近くであんな巨大モンスター出てくるなんて…！

ナギちゃん早くあの岩陰に！

大丈夫？ナギちゃん…

はーっ

はっ はあっ

はあ

う…ん…

…マキリ！援護お願いね！

捕食型の巨大生物に挑む女冒険者たち——!!

…マキリ…そういえば私ギルドで見たわ

この砂漠…新種モンスターの目撃情報があったって…

私達の名を立てるチャンスにしてやる！

Mindvore
マインドボア

ふーっ

ふーっ

ひょっとしたら…こいつを倒せば有名になれるかも…

漫画/COMIC しーあーる

私があいつを引き付けるからマキリは詠唱しておいて！
動きが止まったところに直撃させて一気に畳み掛ける！
ううん！
今よマキリ！
私の最大魔法…！

テンペスト
バースト!!

ぎぃぃぃぃぃ

やーさっすが
マキリの
最大魔法ね♪
ド派手ー♪

キレイに直撃
したし…これは
死んだでしょ

けほっ

う…ん でも
コレ疲れるー…
MPゼロだー

念のため
生きてるかどうか
確かめてくるねっ

マキリはそこで
ちょっと休んでて!

ぴょん

ぺたん

う…うん…

ま…待って
戻って
ナギちゃん!

へ?

あ!
ボフッ
ボロ
ボロ
ボロ
あがくっ…
…斬った触手がもう再生してる!?
レヴラフ…
そん…な…っ
マキリの最強魔法を食らってまだ生きてるなんて…!?
こいつ…予想より
ずっと高レベルの魔物なの…!?
ずる…
マキちゃん!

な…何する気…っ
ぱっ…
かぁ
ずるんッ
くちゅ…
やっ…こいつ『捕食』する気…!?
んくぉ…っ
このっ…！

丸呑み魔力吸収(エナジードレイン)により
溶け朽ちる魔法少女の
コスチュームと正義感!!
氷聖の魔法少女
フローゼア
小説 NOVEL／水雲風騎(みなぐもふうき)
挿絵 ILLUSTRATION／イチナ

それは戦闘というにはあまりにも幻想的できらびやかであった。

微細な氷の結晶が舞う中で、小柄な少女が簡易な装甲を身に着けた屈強な男たちを翻弄していた。

現実感を失わせる最大の要因は少女の可憐さにあった。見るものをひきつけずにはおれない人形のような整った面立ちはあどけなく、柔らかな丸い頬は愛くるしさえ感じる。しかし切れ長の吊り目に宿る揺るぎない闘志が、彼女に怜悧な印象をもたらしていた。

特徴的な青く長い髪はサイドテールにまとめられて、激しい動きにあわせて優雅になびく。

１４０半ばの小柄で華奢な身体は肉付きも薄く、わずかな力で折れてしまいそうな細い手足に、両手で掴めてしまいそうな柳腰は、戦いの最中でしなやかに躍動する。

女性の象徴である乳房もまだ未成熟で掌に簡単におさまりそうなほど。しかし、10代ならではのハリによってその緩やかな曲線は確かにそこに主張される。

性徴が不十分のために広がりきらぬ骨盤とそれに伴い丸みの薄い尻房は、それでも形よく桃型をしており、ほのかに色づきゆく女を感じさせた。

同年代の女子と比べて高さも厚みも慎ましいが、それゆえに少女にはそのコスチュームがよく似合っていた。

ノースリーブの白地のワンピースは密着度が高く、薄手の生地は鎖骨から小振りな両の乳房、なだらかな臍までのラインを浮かび上がらせる。

大きく広がるスカート部は長さこそ短いが、フリルが施されたアンダースカートによって露出は抑えられ、少女らしい清楚さをかもしだしていた。

パフスリーブのショートジャケットが肩と腋を隠し、活動的かつ落ち着いた雰囲気を纏わせていた。

ニーソックスとロンググローブもワンピースと同じように密着し、柔らかな乙女の肉付きを強調する。

随所に配された青いラインと銀色のアクセサリーは氷の結晶である六角形にデザインされており、得物のレイピアの氷の刀身とともに涼やかな印象を与えていた。

それらとは対照的に、腰と胸元にたなびくピンクの大きなリボンは小さな少女によく似合って、寒色による冷たい印象を和らげていた。

少女の名はフロージア。普通の女子学生であった如月舞雪（きさらぎまゆ）が精霊界よりもたらされたエレメンタル・コアを体内に宿し、氷の聖霊の加護を受けて変身した魔法少女である。

異世界よりの侵略者であるファントム・ブリゲートから人々を守るまだ幼い正義の変身ヒロインは、単身で異界の魔術軍団を圧倒していた。

「くそっ！　ガキ一人になにやってんだ！　数で押しこめっ！」

ファントム・ブリゲードの戦闘員たちも魔法によって強化された戦士たちである。事実、これまで軍や警察を子供扱いのうえ壊滅に追い込んでいた。その無敵軍団が、小柄な少女一人を相手になすすべもなく倒されていく。

襲いかかる相手をさながらフィギュアスケートの選手がステップを踏むかのような身のこなしで躱しながら、すれ違いざまに手にしたレイピアで突きを見舞う。

その一撃でたちまち男たちは凍りつき、戦闘継続不可能となってしまう。

「ぐぁっ！　ちくしょう。ここまでか」

「ひぃっ！　は、はやすぎるっ！」

荒ぶるファントム・ブリゲートの戦闘員たちを相手にしてもまったく動ずることなく、冷静に、正確に、フロージアのレイピアが突き立てられていく。

総勢１００を越える戦闘員たちの９割以上が氷の彫像と化し、勝負は決着した。

「ねぇ、まだやるの？」

圧倒的勝勢にもかかわらず、その声音に抑揚は薄い。

「くっ、撤退だ！　ちくしょう、魔法少女め」

残った戦闘員たちが異空間のゲートを開け、氷漬けの仲間を回収していく。

それを阻むこともせず、ファントム・ブリゲートが逃走するのをフロージアは見送っていた。

「……よかった。今日も帰ってくれた」

そっと呟いた声に混ざるのは安堵の吐息。

舞雪は争いごとが嫌いだった。

この街を守るために魔法少女として戦っているが、誰かを傷つけるのは好きではない。

この氷聖の力は相手を氷の中に封じて、傷つけることなく無力化できるのがありがたい。

先ほど撤退を促したのも、これ以上戦うのが嫌だったのと、仲間を回収するものがいなくなるのを案じてのことだった。

正義感と慈愛。魔法少女たるにふさわしき心の持ち主。それが氷聖の魔法少女フロージア――如月舞雪であった。

※

襲撃から一夜明けて、朝の通学路はなにごともなかったかのように平和であった。

制服姿の如月舞雪も、典型的な学生の例に漏れずスマホをいじる。今見ているのはニュースサイトの記事だ。

『フロージア。またしても撃退』

可憐な衣装に身を包んだ自分の姿は別人にしか見えず、当人にもかかわらず現実感が薄い。

街を守る正義の魔法少女フロージアはみんなから愛されるアイドル的存在だった。

一方で舞雪は……。

「……やっぱりかわいくない」

スマホケースに備え付けの鏡を見ると、きつく睨みつけるような瞳と目があった。不機嫌なわけでも怒っている

わけでもない。ついでに視力は2.0だ。
生まれつきのこの目つきと、口べたで内気な性格のために周囲から誤解を受けやすかった。
怖い。きつい。冷淡。
そうしたクラスメイトからの言葉は積み重なって舞雪自身の自己評価にまでも及んだ。
人並み以上に女児向けアニメのヒロインたちや物語のお姫様などの少女らしい可愛さに憧れているのだが、それを押し隠して過ごしていた。
「おーい、まーゆちゃんっ！　おっはよぉっ！」
「……おはよう、ゆりな。髪、乱れてる」
ふいに声をかけられ振り返ると、幼なじみの百合奈が息を切らしてそこにいた。
かなり慌ててきたのであろう。ぼさぼさのロングヘアを見かねて、舞雪は鞄から櫛を出す。
「はぁはぁ、もうー、まゆちゃんってば早いよぉ。早すぎだよぉ。私たちゆとりなんだからゆとりもっていこうよ」
「……はやくない。百合奈がねぼすけなだけ」
こんなやりとりもいつものこと。
おっとりと朗らかな百合奈は舞雪と対照的で、その愛らしい仕草・言動に口では言わないが憧れてしまう。
（わたしも……百合奈みたいにかわいくなれたら）
うまく感情を表に出せないコンプレックスを刺激される。
フロージアに変身してひらひらふりふりとしたコスチュームを纏うことは、代償的に舞雪の心を勇気づけていた。
「あっ、フロージアだ。ねぇ、ねぇ。舞雪。それフロージアでしょ。すごいよね。かわいいのにかっこよくて、無敵の正義の味方なんだよ。憧れちゃうよね」
「そ、そうかな……えへへ」
「なんで舞雪が照れてるの？」
間接的とはいえフロージアを通して自分のことを百合奈がかわいいと言ってくれた。
そのことがとても嬉しかった。
街の人々にとっての正義の魔法少女は、舞雪にとっても大切なものとなっていた。
今日はきっといい日になる。
なんとなくそう思った朝の通学路であった。

※

だから放課後にファントム・ブリゲードの侵攻があったとしても、いつものように撃退できると思っていた。
戦闘員などどれだけいても、倒せると。小さな慢心が芽生えていた。
「氷聖なる魔法少女フロージアっ！　全ての悪よ。震えて眠りなさいっ！」
「うおっ！　き、きやがった！　おい、氷の魔女がきたぞぉっ！」
舞雪がフロージアに変身して現場に到着すると、戦闘員がざわつく。
明らかに怯えの表情を見せて後退しようとするものまでいた。
（そこまで怖がらなくても……わたし、怖くないし）
一人の女の子として、相手のそういった態度に少し傷つきながらも、正義の味方としても自分の活躍のおかげでもあるし、できるだけ戦闘を避けられそうでもあったから、複雑な気持ちになる。
「今なら見逃すから……帰って」
心優しき魔法少女の提案は、しかし戦闘員たちのダミ声にかき消される。
「うるせぇっ！　今日という今日はその生意気な澄まし顔にべそかかせてやるからな」
「百倍返しでやっつけてやるからな」
異世界人故の不慣れであろうか、彼らのいささか微妙な語彙に戸惑いながらも、フロージアはレイピアをかまえる。
「ま、待て。お前の相手は俺たちじゃないぞ」
「へへ、謝るなら今のうちだぞ。こいつの恐ろしさにびびるなよ」
戦闘員たちの列をわけて、巨大な異形が現れた。
一目見て生理的嫌悪感を抱くそれは、たとえるなら芋虫とサンショウウオの醜悪なキメラであった。
ぶよぶよとした長い胴体はぬらぬらとした粘液に覆われ、無数の短い足が側面で絶え間なく動いていた。
頭部の半分以上はあろうかという巨大な口は頸部の中程まで裂けており、何本もの赤紫色の舌が分厚い唇から別種の生物かのように覗いていた。巨大な眼孔にはいくつもの眼球がはちきれんばかりに詰め込まれ、独自に動いてはこちらの動きを警戒している。
もしフロージアとしてこの場に立っていなかったら悲鳴を上げて逃げていたかもしれない気色悪さ。
しかし、舞雪ではなく正義の魔法少女である今、おぞましさを押し隠しこの化け物を倒さねばならない。
フロージアはレイピアをかまえ、慎重に距離をつめていく。戦闘員たちは両者を遠巻きにして野次をとばしていた。
こちらの動きに反応は鈍い。
「一気に、決める」
ブーツの底に氷の刃を形成すると同時に、周囲の地面を凍らせる。スピードスケートの要領で爆発的に加速すると、瞬時に間合いをつめて怪物に一撃を叩き込む。
身をくねらせて避けるも間に合わず。巨体の側面に真一文字の傷が入る。だが、浅い。柔らかく弾力のある皮膚はレイピアの細い切っ先では完全に切り裂くことができず、表面をわずかに傷つけただけにとどまった。
「だったら……」
フロージアは更に加速し、何度も怪物の周囲を回る。こちらの動きについていけず、不格好にのたうつ相手は無

防備に背中を晒していた。
「ここっ！」
絶好のチャンスにフロージアは踏み切ってジャンプする。高速のサルコウジャンプは実に七回転にもなり、その勢いのまま切りつけた。
フィギュアスケートのジャンプは着地の際に何百キロという加重がかかる。それを利用してレイピアの刃先に多回転ジャンプの超加重を乗せたのだ。
「ギャアアアアア」
狙い通り、氷の刃は深部まで達した。が、そこで想定外のことがおこる。レイピアの刀身がぐにゃりと溶けて、流れ落ちていく。
「ど、どういうこと⁉　きゃあっ⁉」
驚く間もなく、怪物の傷口から粘液が噴出する。武器を溶かされた動揺から足を止めてしまったフロージアは避けることができず、まともに浴びてしまう。
「うぇ、ぺっぺっ。な、なにこれぇ」
なんと粘液を浴びたところから、フロージアのコスチュームがレイピア同様に溶け落ち始めていた。
特に大量に浴びた前面の損傷が激しく、慎ましやかな胸部が露わになる。
「きゃぁっ⁉　な、なにこれ⁉　わ、わたしの、フロージアのコスチュームが溶けてる⁉」
楚々とした膨らみは若さ故のハリによってツンとやや上向きとなり、その先端の桜桃は薄いピンクに色づいていた。
「み、見ないで……変態っ。女の子の服を溶かして喜ぶなんて……最低だわ」
人目に触れてはならぬ乙女の象徴を必死で手で隠し、羞恥に顔を赤く染めるフロージア。
その姿には勇敢な戦士としてよりも、10代の少女舞雪が強く出てしまっていた。
「うひょおっ、かわいいおっぱい丸見えだぜ。ちっちゃいけど、そこがまたたまらん」
「げへへ、きゃあ、だってよ。あのフロージアちゃんが、顔真っ赤にして恥ずかしがってるぜ。勃起もんだぁ」
「ぺったんこでも恥ずかしがることないぞ！　それがいいんだ。なんなら揉んで育ててやろうか」
半裸の状態を揶揄されてますます羞恥心を煽られる。
胸を隠した不自然な姿勢と、視線を気にしてしまうために、少女の動きが明確に鈍くなる。
再びレイピアを形成しようとしたその瞬間、今度は怪物の口が大きく開き、大量の粘液を吐き出した。
今度こそとバックステップで避けるも、飛沫がかかった氷のエッジが溶けてしまった。
「きゃうっ！」
無様に尻餅をついてしまったフロージアを、戦闘員たちが嘲笑する。
「おいおい、尻餅だなんてかっこ悪いぞ。正義のヒロインさんよぉ」
「へへ、そいつの体液は魔力を分解しちまうんだ。魔法少女の武器やコスチュームに一番効くんだよ」
「つるぺた魔法少女のストリップショーたまんねぇなぁ」
「あ、あなたたち……絶対後で許さないんだか――んぶぉおおっ！」
ヤジに反応してしまったフロージアの眼前に怪物の口がすぐそこまで迫っていた。悲鳴を上げる間もなく、上半身が呑みこまれる。
「ひぃっ！　い、いやあああっ！」
その気色悪さに声を失い、わなわなと震えて青ざめる。普段の冷静さなど霧散し、思考が真っ白に停滞する。
魔獣の口内で待ち受けていたのは無数の舌であった。
レオタード生地をしゃぶりながら、肋骨をなぞるように舌を這わせていく。鳩尾まで到達すると臍に吸いつき器用に舌先で咀嚼する。その間、右手はいとしげにしゃぶり尽くされ、左手は執拗に隅々まで舐め回された。
「ふぁあっ……やぁっ、くすぐった、はひぃんっ！」
肌を伝わる妖しい戦慄に、身を捩って悶える敗北の魔法少女。神経を這いずる不快な刺激の中に、まばらに混じるピンクの斑点にはまだ気づけてはいない。
小さな口のついた触手がフロージアの膨らみに齧りつき、軽く歯を立てながら後が残るほどに強烈に吸引する。当然たっぷりと唾液を塗り込み、存分に少女の味を堪能した。
「あひっ、ふゃぁっ！　こ、こんなの違――はきゅううんんっ！」
乙女の象徴を貪られ、顔を真っ赤にさせて喘いでぷるぷると震えるフロージア。細く引き締まった胴体は隙間なく赤く染まって、唾液でぬらついて艶めかしく照かる。
くすぐったいだけのはずだ。おぞましいだけのはずだ。それなのに、胸が切なく締めつけられて苦しい。生温かな唾液の感触がジンジンと表皮を焼き、吸引された個所の神経から鋭いパルスが送られて来る。
「ひゃああっ！　んぷぁ、あふぇ、んひぃいいっ！　そ、そんなな、なめないれぇっ！　気持ち悪いっ！」
たっぷりと粘液を含んだ舌で上半身を舐め回され、さすがのフロージアも悲鳴を上げてしまう。
「いやぁ……やめてぇ……フロージアの……正義の魔法少女のコスチュームをべとべとに汚さないでぇ」
舞雪にとって特別な意味を持つ聖なるコスチュームだったが、魔獣の唾液が染みこみ白い生地が透けてしまっていた。
そのことに汚辱感を抱くも、完全に上半身を拘束されたうえに、魔力を分解されてしまっては抵抗のしようがない。
捕らわれの魔法少女にできることは、口の外に出た足を無様にばたつかせることだけだった。
「おお、あの無敵のフロージア様がか

姉の仇を討つために、自ら生贄を志願して
復讐を誓う戦巫女！
復仇の退魔巫女
溶かされる復讐心
小説 NOVEL／千夜詠（せんやよみ）
挿絵 ILLUSTRATION／みかん。

満月を覆っていた雲が晴れ、置き去りにされた一人の少女の姿を露わにした。

腐った木材の匂いを濃く放つ神社の境内の前で、彼女は全身を亀甲状に縛られ、両手は後ろ手に、足首も拘束されている。

純白の羽織に朱色の袴は巫女装束で、長い艶やかな黒髪を首の後ろで結わえている。

そんな状態でありながら、悲しみすすり泣く事もなく、静かに彼女は時を待った。

——もうすぐ、悲願が叶う。

魅白水音（みしろみなね）は、三年前の、同じような満月の夜を思い出していた。

生贄を授けよ。さすれば大神は鎮まり、災いを成す事はないだろう——白髪の猿どもはそう言い放ち、神の使いだと嘯（うそぶ）いていた。

それが本当に神であろうとなかろうと、村人らに抗う術はなく、奴らの望む若い女の生贄を選ぶしか道はなかったのだ。

——姉さん、仇はきっと私が討つからね。

忘れようもない。

生贄に選ばれたのは、水音の姉であった風音（かざね）であった。

妹から見ても、美しく気立てのよい彼女は、優しく、誰からも愛される、そんな女性で、隣村の村長の息子とは恋仲だった。

これも村の為だから、泣かないで、水音——。

村外れの神社に、たった一人取り残された姉。妹は大人達が止めるのも聞かずに、後から追いかけていく。

そこで、水音は見てしまった。

人の大人ほどの白い大猿どもが、十匹ほど、よってたかって姉を嬲り者としているところを。

着物は破かれ、裸に剥かれた風音は、猿の肉棒を口に銜えさせられ、後ろから犯されていた。

泣き続ける姉を木の枝で叩き、笑い、乳房を咬み、お尻の孔まで蹂躙していく畜生ら。

直ぐに助けにいきたい、でも、怖い。

水音は、ガタガタと震える事しかできなくて、悲しくて、悔しくて、木々の陰から見ている事しかできなかった。

やがて、風音の全身は白濁に染まり、虚ろな瞳のまま、声すら満足にあげられなくなった。

その時、現れたのが、大神と呼ばれた存在。

そいつは全身がヌメヌメと光沢し、粘液を体中から滲み出させ、手も足もなかった。

猿どもが慄き、平伏する。

水音は理解した。

そいつは神なんかじゃない。蛭（ひる）の化物。妖怪だった。

巨大な口が開き、蛭妖は風音を一呑みにすると、闇の中に消えていった。

猿妖達も去っていく。

神社は鎮まり返る。

突然響いたのは、少女の泣き叫ぶ声だった。

水音はこの時に誓う。

姉を辱めた猿ども、食らい奪っていった蛭妖、こいつらを決して許しはしない。殺す、必ず自分の手で殺して、仇を討つのだ。

天真爛漫であった少女は、姉の葬儀を終えると、村を出た。

半年、自分を鍛えてくれる者を探し求め、妖怪退治の専門家に弟子入りをして、それから二年半、修行に明け暮れた。

ようやく、師匠から認められたのは、半月前の事。村に帰る決意をしたのである。

——あれから、三年。私にとっては長かったけど、今夜、必ず、滅してみせる。

私怨と同時に、これは今も苦しめられている村の皆の為でもある。

戻ったばかりの水音は自ら生贄に志願した。復讐の機会はこれしかないのである。

許してくれ——そう言って、村人は水音を縛った。昨年、生贄に選ばれた女子が逃げ出した為に、こうして縄で拘束されるようになったが、これくらいは問題ない。

ただ、巫女装束の上からとはいえ、肌に食い込んでくる縄の感触が、どうにも悩ましく感じた。

早熟な水音の肉体が、今、ほんのりと汗ばんで、牝の香りを辺りに放ちだしている。

豊満な乳房が裾野を引き絞られて強調され、抉り込む荒縄の刺激から、痛みとそれ以外の別の感覚が湧いてきた。

はあ、と一つ息を吐く。

緊縛を気にしている場合ではなく、落ち着こうと考えたその時、藪が揺れる音がして、獣臭い気配が感じられた。

来た——。

十匹の全身白髪の猿妖どもが、月光の下、その姿を現わした。

「いる、いる……。さあ、今年は、どんな娘か」

「おお、これは美しいオナゴだ。よい女の匂いをさせよる」

「乳もデカい。尻もそそる」

「大神様が食らいにくるまで、時間がない。さ、さ、さっそく」

全身を舐め回すような視線に晒され、嫌悪と悪寒の中、憎悪を燃やす瞳を奴らに向ける。

人の男も持つ劣情をその醜い体に表現しているように思えた。

悟られぬように、怯えたふりをする。

「ああ、怖い……。何をなさるのですか」

横たわり、自由の利かない四肢で、這いずるようにして、奴らから離れようとする。

猿妖どもは、嗜虐的に笑い、直ぐに取り囲んできた。

髪を乱暴に掴まれると、強引に上半身が起こされる。

「う……、い、痛いです。やめて……」

生贄の訴えなどに耳を傾ける事などなく、一匹が、羽織の襟を左右に広げてきた。
「いや……っ」
体に張りつくような黒い下着は、そそる牝肉もそのまま浮き上がらせ、質量もたわわな釣鐘状の二つの膨らみが夜風に晒され、下卑た笑いが聞こえてくる。
大勢の目に晒された恥ずかしい女の象徴は、成長も著しい張りと弾力を誇示するように、解放の反動でぷるぷると揺れていた。
「デカいな」
「ああ、デカい。いやらしい乳だ」
視線が撫で回してくるような感覚。
――ふん、もっと興奮なさいよ。意識がこの体に向いている間に……。
涎を漏らした、猿の唇が近付いて、伸ばされたざらつく舌が、桜色の乳首を一舐めしてきた。
「ぅひ……」
ぞぞっと背筋に悪寒が走り、口角をぐっと下ろす。
さらに別の個体が、むんずと乳房を鷲掴みにしてきて、そいつの指が柔肉に沈み込んだ。
「やわらけぇ……、それに、押し返してくる。けけ、これはいい乳だ」
愛撫などではない。ただ欲求を満たすだけの嬲りをされて、眉根を寄せた。
「ぐ、うう……、い、痛い……」
胸の肉果の美しい形状が、卑猥に歪まされ、暴力的に捏ねられてしまう。
さらに他の猿も腕を伸ばして、乳首がきつく抓られた。
「い――っ！　やめて、痛い、痛いっ」
潰すような勢いで揉みしだかれ、捻じ切るかのように摘まみあげられる。
女の泣き叫ぶ様子に、猿どもの肉棒は、どんどんと大きくなって、天に向かって角度を上げていった。
昔、姉を嬲っていた時と変わらぬ性質に、怒りが込み上げてくる。
――こ、こいつら……、いい加減に、しなさいよ。
後頭部で後ろの奴を叩き、ひるんだ隙に立ち上がる。
縛られた足で、ぴょんぴょんと跳ねるようにして、無様に逃げだした。
「おいおい、逃げてくぞ」
「はは、ほらほら、早くいかねぇと、お仕置きすっぞ」
――今のうちに笑っておきなさいよ。もうすぐ、何も感じられなくなるんだから。きゃ……っ！
背中に衝撃を感じた途端、前のめりに倒れ込んだ。
緊縛のまま、お尻を突き出すように上半身を地につけてしまう。そこに、猿の足が、顔を踏みつけてきた。
「く……、こ、この……」
屈辱的な状況と格好に唇を咬む。
――もう少し、あとちょっとで、完成する。それまでは――ひゃ⁉
ビシっ！　木の枝で作られた鞭が荒縄の食い込んだお尻に襲い掛かった。
ニタニタと笑っている猿妖らが、片手で肉棒を扱き立てながら、女子を虐める。
パシっ、バシっ……。何度も振るわれる木鞭の鋭さに、朱色の袴が引き裂かれ、破れていった。
「ぁひっ……、ヒぃ――、や、やめぇ……、ぅ、うぐ……」
下半身をズタズタにされる痛みと肌を露出されていく羞恥に同時に襲われ、堪え難さに歯を食い縛る。
強靭な腕にも袴は千切られ、薄い下着越しの鼠蹊部まで剥き出しにされてしまった。
周りを囲んだ猿どもの肉棒の先端からヌルヌルとした液体が滲み出ている。
――汚いもの出して……。全然気付いていないようね。
彼らの視線が集中するのは、巫女少女の股座。
汗ばんだ牝の肉裂の形状が薄布に浮き上がり、蒸れた女から匂い立っていた。
球体状に良く肉付いたお尻に蚯蚓腫れが刻まれる度に、震えてくねる。下着の一部が破られ、お尻の孔まで露出してしまう。
――いや……、恥ずかしいとこ、出ちゃってる。もう少し、我慢よ。こいつらを滅してやるまで！
再び髪を掴まれ、顔を上げさせられると、眼前に禍々しい肉根が迫ってくる。
「ちょ、いや……。く、臭い……」
猿の肉棒が唇に押しつけられてきた。形状は人間の男性のそれと酷似していたが、産まれてから一度も洗われていないような酷い匂い。
先走りの汁が滴る先端が、少女のぷっくりとした唇を汚し、鼻を摘まれ口を開かれると、無理矢理に捩じ込まれてしまう。
「うぅ――ぅっ、んぐっ！」
生々しい硬さが口内に広がり、そこから一気に喉奥を突き込んできた。気色悪さと物理的な刺激で酷い吐き気を催してくる。
「ふぐっ、んっ、んっ、ん――」
ぢゅぶ、ずぢゅ、ぢゅっ……。舌が奥に押し込められ、押し返そうとすると勝手に絡みついてしまう。
涙の滲んだ上目遣いで睨みつけてやるのだが、それがかえって畜生の嗜虐心を煽り立てる。
「けけ、生意気な目をしやがって。ほら、もっとしゃぶれ……」
唇が自然と肉茎に吸着して、口端から涎が漏れてしまう。
頭を押さえつけられて、前後に揺さぶられた。恥垢を舐めさせられ、口内が掻き回される。息苦しさが増して、体が震えてしまうのだ。
周りの猿竿から、びゅくっと精液が放たれ、体中に振りかけられてしまう。
ぶっ、ぢゅぶ、ぬぢゅ、ぬぢゅっ……。粘りつく腐臭に顔を顰め、押し込まれる苦しさに、反射的に喉奥を締めつけた。
「おほっ、飲み込め」

美しくも対照的な姫姉妹
その心中に潜むものは……
ギギィ
キャフ
よし！
見事です
エレノア皇女殿下
仕留めたぞ
今日3匹目だ！
あぁかわいそう…
姉様やっぱりわたくし
狩りは好きになれませんわ
丸呑みにされた
皇女は淫欲の苗床
漫画／もみやま

フレデリカ
あ…
スッ
すまない
お前を連れてきたのは
お前を思っての
ことなのだ
王族たるもの
狩りのひとつも
たしなめなくては
他の王子たちに
示しがつかないだろう
ギャ
姉様…
エレノア様は本当に
フレデリカ様を
溺愛していらっしゃる
ああ おふたりは
本当に仲の良い
姉妹だよ
ガサササ
獲物だ！
お前たち
茂みの外に
誘い出せ
はっ
!?

なにっ

ここいつは魔物…！

ぐっ

こんな城の近くになぜ魔物がいる！

フレデリカ逃げろ！

フレデ――…

リカ…？

ニヤァ

あぁら大変
麗しのお姉様が
こぉんなおぞましい
魔物に捕まって
しまっていますわ

ご指示通り
エレノア様を魔物に
捕縛させました
ええ成功ね
よくやったわ

フレデリカ
何を…
にゃる
にゃる

文武両道で貴族や民たちからも愛されおまけに…

フッ

もぁぁぁぁん

その綺麗なお顔と魅力的な女の体…

なんだ…？妙なガスを出している!?

くっ

ぐぐぐ

力が…

抜けていく…

だらぁん

フレデリカ…

気に入らないのよ

ハァ

ハァ

ニクショクケイ
VRゲームにハッキングしたら
女ハンターを丸呑みできる
モンスター植物になっていた件
丸呑みできる
身体って最高！
触手で弄って女体開発！
全身ヌメヌメ蹂躙しまくり！
小説 NOVEL／冬野ひつじ
挿絵 ILLUSTRATION／はらいた

――カタンッ。

その音が大音量のBGMの向こうで妙にはっきりと聞こえたので、蓼原圭一はパソコンの画面から現実へと一瞬で引き戻されてしまった。

「……んだよ」

玄関の方を振り向かずとも、心当たりはあった。新聞受けに入れられたのは恐らく督促状だろう。携帯料金かクレジットか、あとは電気代の――。

「分かってるって……止められる前にはなんとかするさ……」

舌打ちした男の鼻先を、窓の隙間から流れ込んできた風がふと掠めた。夕暮れ時の匂いに、急に空腹が甦った。

「はぁ……やっぱりもう限界だ……カルビ弁当くらいなら確かまだ……」

慣れた手付きでログアウトを済ませ、足元のリュックから財布を取り出すが、

「って、あぁ……ッ！」

次の瞬間それを壁に投げ付けていた。小銭が数枚、パラパラと飛び散った。

「クソッ！　先週有り金全部で課金しちまったの忘れてた……ッ！」

しばらくの間、静まり返った部屋で圭一は頭を抱え、廃品回収の車がゆっくりと通り過ぎていくのを聞いていた。腹がキュルルと心細げに鳴った。

「……もう、喰うモンも金もないのか」

髭が伸び放題の頬を何度も擦る。まだ青年の面影は残るが、そろそろ肉が付き始めた。そんなシルエットだ。

「さすがにこの状況は、うん……色々とヤバイな……うん……」

男はパソコンに向き直った。

「こうなったら……やっぱり一発逆転に賭けるしかないか……」

机の上に積んであったバーチャルリアリティシステム用のゴーグルとグローブに手を伸ばし、装着する。

「別プロジェクトだったとはいえ、古巣の職場のプログラムに侵入するっていうのは、気乗りしねぇんだが……」

呟きながらシステムを起動させた。

『モンスターラビリンス』

目の前に眩い空間が一気に広がり、オーケストラの壮大な曲と共に、まるですぐ後ろにいるかのようなドラゴンの咆哮が轟いた。

『本日は獲得タラント3倍キャンペーン最終日！　狩りまくれ！』

男は引き攣った笑みを浮かべた。

「よしよし、今頃運営のサーバーには全プレイヤーの有り金がぞくぞく流れ込んでるって訳だ……」

国内最大級に成長したオンラインゲーム内で流通する仮想通貨『タラント』。圭一の狙いは、膨大な金額になっているはずのそれをハッキングによって全て自分のモノにする事だった。

「それにしても随分とガバガバなプロテクトだなおい……もう一年か？　あん時俺をクビにしなかったら、もっといい出来にしてやったのに……」

スタッフが入れ替わったためシステムは多少変わったようだが、ベースは同じだ。導かれるように指が動き出す。

「全く……アイツらが俺の意見を聞かないからこんな事になるんだからな」

罪悪感を振り払うかのように前のめりになり、コマンドを打ち込んでいく。

「まぁいいさ、見てろよ……この俺は今から勝ち組になってやるんだ……！」

架空の個人データで作り上げた新規アカウントが、見る見るうちに完成した。オーソドックスな男性ハンターのキャラクターだ。軽甲冑に身を包み、大剣を手にしている。だが他のプレイヤーと違うのは、その懐に新型の時限ウィルスを隠し持っているという点だ。

「よし、あとは一番近くの通貨交換所でこれをブッ込めば……と」

ゲーム世界の入口に立ち、圭一は高揚感を噛み締めながら自分の全身が光に包まれるのを眺めていた。

（こんな簡単に入れるんなら、遅かれ早かれ誰かに盗られてた金だ……へへッ、悪く思うなよ……！）

数分後にはウィルスが作動し、サーバー内の通貨の全残高を吸い上げる。その頃には自分は悠々とログアウトしている――。

はずだった――。

（え……？　何だこれ……？）

ログイン完了の表示が消えても、圭一の身体はぴくりとも動かなかった。

（まさか、こんな時にバグかよ!?）

慌てて自分の身体を見下ろそうとしても、首すら動かせない。脳波を読み取るこのタイプのゲームでは、ログインと同時にプレイヤーの意識はキャラクターと同化し、五感も完全に再現されるはずだった。

（おいおい勘弁してくれよ……！）

圭一はジャングルの中に立っていた。全身を包む蒸し暑さに不快を覚えるよりも先に、半熟の卵の黄身のようにドロリとした、質感すら感じさせる光に気付く。夕暮れだ。生い茂る葉の向こうに見える光に、何故かゾッとなった。

（皮膚感覚も、視覚も、問題ない……つまり、システムは正常で、俺の身体だけが動かないって事で……これ……ヤバいよな……？）

そう呟き、自分の声が出ていない事に気付く。

（え、声も出せないのかよ……？）

そう叫んだはずなのに、身体全体がまるで一繋がりの管にでもなったかのような、ゆらゆらと揺れる感覚が脳に伝わってくるだけだった。

（く……ッ、何で動けないんだよ!?　そのうえ声も出ねぇって……えっ、俺、今どうなってんだ……ッ!?）

木々の葉の一枚一枚までが見えるというのに、自身の姿だけが全く分からない。男は軽いパニックに陥りかける。

（と……ッ、とにかく、落ち着くんだ……！　この状態でモンスターなんかに出くわす前に、まずは、そう、安全を確保して……）

額の汗を拭おうと腕を上げた瞬間、

ヒュンッ！

目の前を、赤みがかった太くて長い物体が横切った。

（え、今の……何だ？）
慌てて腕を下ろすと、その物体も視界の下に消える。
（まさか……）
もう一度ゆっくりと腕を振ると、今度ははっきりと、肉色の太いロープのようなものが空を切る。
（まさか、これが俺の……う、腕……？）
慌てて反対の腕も動かす。4、5メートルはあろうかという禍々しい肉の鞭が地面の上でのたくるのが見えた。そして視線は突然切り替わり――。
（な、何だよこのバケモノ!?）
圭一は驚愕した。
肉鞭は長さ5メートル程の黄緑色をした巨大な物体から生えていた。その足元は地面に埋まり、のっぺりとした胴体の先端には丸く歯のない口が開いている。イソギンチャクにも食虫植物にも似ている、不気味でどこか卑猥な連想をさせる形状だ。
（なんてこった！　これが、俺……なのか……!?）
信じたくないが、身体を動かせば視界の肉筒も同じ動きをする。どう見ても、この異形は自分の姿だった。
（お、俺は……モンスターになっちまったのか……ッ!?）
ヒュン！　ヒュン！　ヒュンッ！
（……あれ？　さっきよりは身体が動くようになってきた……？）
皮肉な事に、動揺のあまり闇雲に動いているうちに経験値が上がったらしい。次第に身体の感覚が隅々まで分かるようになってきた。足首から下は動かせないが、他の部分はゴムのような伸縮性があり、コツが掴めれば意識した通りに動かせる。圭一は少し落ち着きを取り戻す。
（運営のサーバーには繋がる……これならなんとかなるかもしれない……！）
思い返せば同期達のいた開発チームは隠しコマンド的な仕込みが大好きな事で業界でも有名だった。これもまたハッカーへのお仕置き的なイベントなのだろう。そう考えると、安堵と共に怒りが込み上げてきた。
（くそッ！　アイツら、とことん舐めた真似しやがって……！）
怒りに任せてブンブンと腕の触手を振り回しているうちに、
（何だ？　今度は腹の中がくすぐったいような……？）
肉鞭で腹の辺りを恐る恐る撫でる。胃の中で何か蠢いてるような、名状しがたい感触だ。
（この中って、どうなってるんだ？）
そう呟いた途端、視界いっぱいに揺れるピンク色の柔らかい壁が飛び込んできて、圭一は仰け反っていた。
（き、キモチわりぃ……！）
下の方では無数の触手が生き物のように波打っている。
（うぇ……これが胃の中か……人間の一人や二人すっぽり入りそうな……）
自分の身体の中へも自在にカメラの切り替えができるらしい。全身に視覚細胞を持っているモンスターという設定のようだ。
（触手の一本一本まで動かせるなんて、スゲェ仕様だけど……コレ、何に使うんだよ……？）
首を傾げた途端に、グギュルルル！と腹が鳴った。
（なんか、とにかく……腹減った……）
空腹感はどんどん増してくる。空っぽの胃袋を覗いているだけで、これまで覚えた事のない猛烈な飢餓感が男の脳髄を蝕み始めていた。
（あぁ、もう何でもいい、喰いたい！）
脱出策を講じなければならないというのに、思考が纏まらなくなっていた。
（喰いたい……喰いたい……）
ゆらりゆらりと長い身体をくねらせながら、圭一は身悶えした。
その時だった。
ガサガサと目の前の茂みが揺れ、文字通り息が止まりそうになる。
（モンスター……!?　このままじゃ襲われる……！）
「……そこか！」
しかし、姿を現したのは琥珀色の瞳の若い女だった。同時に圭一の視界に彼女のステイタスが表示される。
（良かった、人間だ！　しかも最上級ハンター……！）
大剣を持ち、モンスターの皮を使ったジャケットを羽織った女ハンターは、意志が強そうな眉を顰めてこちらを見上げている。日焼けしているのかやや浅黒い肌だがそれが良く似合っている。
（最上級ハンターなのに、腕も脚も細い……その割にオッパイはデカそうだ）
かっちりと嵌められた手甲は鋼で覆われている。武骨なブーツは草を踏みしだくにも砂漠を歩くのにも耐えそうだが、そういった実用本位といった装飾性の乏しい装備だからこそ、僅かに覗く胸の谷間や腰の曲線が強調され、逆にフェロモンを漂わせている。
（散々言われちゃいるけど、実際にこうして見てみると生身にしか見えんよな……コスプレなんかよりも断然迫力あるし、いやぁ、エロ過ぎるわ……）
圭一の目は強さの証のレア装備よりも、引き締まった身体のラインにすっかり奪われていた。
（へへッ、こんなに見ていてもバレないなんて、モンスターになるのも案外悪くはないか……なんて……）
空腹すら忘れて思わぬ幸運を喜んでいると、
「ふぅ……レアモンスターだと思ったら、ただの汚らしいハエ取り草か」
釣り目気味の瞳に一瞬落胆を浮かべ、女ハンターが吐き捨てる。その言葉に男は我に返った。
（助けてくれ！　俺はモンスターじゃない、人間だ！　バグのせいでモンスターにされちまったんだ……ッ！）
だが、必死に訴えるほど巨体は不気味にくねり回るだけだ。
「なんだ、私とやろうっていうのか？」
来た道を戻ろうとしていた女ハンターは目に殺気を宿し、剣を構える。
（ダメだ！　俺はやはりモンスターに

しか見えないのか……!?)
「まぁいい、ならばこのアリス様の剣の錆にしてやる……光栄に思え！」
まずいと思った瞬間、タンッ、と地面を蹴って、女ハンターは真っ直ぐに突っ込んできた。
(や、やめろッ！)
大きく跳躍した女ハンターに向かって思わず腕を振った瞬間、
「くは……ッ!?」
伸ばした触手が女ハンターの胸元を一瞬で搦め捕っていた。
「は、放せ！」
(ち……違う、そんなつもりは……)
狼狽して触手を引こうとしたが、むにゅ……ッ！
(すげぇ……見た目よりずっと柔らけぇ……！)
女ハンターの胸を掴んだ感触に、圭一はつい触手の先端に力を籠めてしまっていた。
「まさかコイツ……私を喰う気か!?」
宙に吊るされた女ハンターは大剣を振るうが、触手に力を籠めるたびにその刃は空しく跳ね返される。
(ば、バカ言うな！　俺は人間だぞ！)
弁当一つ買う金がないからとはいえ、そこまで言われる筋合いなどない。男は憤る。
(誰が人間なんか食べるかよ……ッ！)
しかし、獲物を掴んだ男の身体は明らかに意思とは関係なく、捕食のための動作に移っていた。
(だいたいプレイヤー同士でのバトルは禁止だろうが！　規約違反なんかで凍結でもされたらそれこそ笑い事じゃ……って、おい……本当にこれ、止まらないぞ……!?)
ゴポポ……グポ……ッ……。
留まる事を知らない飢餓感は、もはや痛みに変わりつつある。
(いやいや待てって……！)
グププッ、グプ……ッ！
体内に汚らしい水音が満ち、口の中に何かが湧き上がる――唾液だ。
(違う！　俺はこの女を喰う気なんかない……なのに身体が勝手にッ!?)
どうにかして動きを止めようと念じるが、身体は泣きたくなるくらいに言う事をきかない。
(くぅッ！　俺の身体なのにッ、勝手に動くな……ッ！)
「な、なんだこのモンスター!?　こんな生態な訳は……まさか、ステイタス異常を起こしてるのか……!?」
唾然として目を見開いている女ハンターの大剣を、もう一本の触手が無慈悲に地面に叩き落とす。そして、
(俺は悪くないぞ俺は悪くないぞ俺は……あぁぁ……ッ!?)
グパァ……。
(や、やッ、やめろ……ッ！　く……ッ、人間なんかッ、喰いたくない……！)
出鱈目な伸縮を繰り返しながら、巨大なモンスターは二本の触手を天に向かって差し伸べた。
(ダメだッ！　やめろぉぉ……ッ！)
だが、圭一の抵抗も空しく、唾液の糸を引きながら大きく開いた口腔に、女ハンターはゆっくりと落とされていく――。
「この気持ち悪い化け物め！　さっさと私をここから出せッ……！」
(んはッ、ちょっと、落ち着けって！)
女ハンターは怒りの表情で両腕を突っ張り、モンスターの喉元を内側からガシガシと蹴り付けている。痛くはないが、気持ちの良いものではない。
「死ね！　死ね死ね死ねッ！」
今度は手甲を嵌めた手で拳を握り、渾身の力でパンチを繰り出し始めた。
(んぐッ!?　頼むからやめろって！)
どうにかして静かにさせようと圭一も必死だ。食道を蠕動させ、身体を前後左右に振り回していると、やっと女ハンターのパンチから力が抜け始めた。
「くッ……賞金ランキングトップの私が、なんでこんな目に遭うのだ……」
窄めた肉壁に挟まれたまま、フゥフゥと荒い息を吐くだけになる。身体中に圭一の唾液が纏わりついているのが、当人は意識せずとも煽情的だ。
(本名は葦原ありす……へぇ、女子大生なんだ……)
体内に入れた途端に、女ハンターのステイタス画面の表示は赤く変化した。普段なら決して出てこないはずの個人情報が満載だ。
(HPをだいぶ消耗したようだ……大人しくなった顔もそそるな、ありす)
本名を口にしながら濡れて上気した頬や胸元を何度も眺めるうちに、圭一は、胃ではない、もっと下の、かつて足があった部分のその付け根が硬くなる感覚を覚えていた。
「やだ、この唾液……気持ち悪い匂いがする……」
桜色の唇に付いた粘液を指で拭い忌々しげに呟くアリスの様子を、圭一は凝視していた。
(あぁ、いいな……柔らかくて、う、美味そうだ……)
ぐぎゅる！　ぎゅるる……ッ！
肉壁が激しく収縮して、女ハンターの顔が再び嫌悪に歪んだ。
(……いや待てよ、美味そうって……どういう事だよ？　それってつまり、喰いたいって意味なのか……？)
恐ろしい衝動を必死に打ち消す。
(だから俺、何を考えているんだ？　いくらゲームの世界だからって、さすがに人間を喰える訳ないだろ……！)
そんな思いとは裏腹に、
グプ……ッ、ゴププ……！
圭一の煩悶を知ってか知らずか、モンスターの身体は捕食活動を再開する。
(おいおいおいおい……俺にはそんなつもりはこれっぽっちも……)
「やッ、やめろッ！　んあッ……!?」
アリスの顔が引き攣っている。食道が大きく波打ち、その身体を下へ下へと強引に運び始めたのだ。
「ひッ!?　落ちるッ……!?」
両手を頭の上に伸ばし、少しでも留まろうと肉壁に指先を立てるが、粘液

著者近刊
『欲望特急　スレイブバーサー搾精捜査』『交配惑星　エイリアンに娶られし少女戦士達』『魔法少女は背徳の檻で淫らなフェアリーテイル』、二次元ぷち文庫でも『とろけるいもうと　柚乃の秘蜜』『セレブ母娘飼育日記』など公開中！
好評発売中！

塗れになっているためツルツルと滑る。無駄な抵抗でしかなかった。
（ダメだッ、止まらない……！）
圭一もまた焦っていた。
（俺の身体、本当にこの女を喰う気なのか……!?）
だが、意思で制御できる身体ではもうなくなっていた。なす術もなくアリスが呑まれていく様子を見ているしかなかった。
ゴブッ！　ゴブッ、グプププ！
（俺ッ、人間を呑んでる……本当に、うぁぁ……ッ、呑み込んで……）
ゴブッ、グチュ……ン！
遂にアリスの身体が胃袋に落ちた。
「なんだこの触手……ッ!?　やッ、こっちに来るなッ！」
悲鳴を上げながら女ハンターは胃壁を這い上がろうとする。その爪先を、子供の腕ほどの触手が束になって追いかけ、脹脛（ふくらはぎ）に巻き付き引き摺り下ろす。
ブビュ！　ブビュゥゥッ！
まるで歓迎するかのように、胃壁から、そして胃の底から熱い胃液が一斉に女ハンターへと振りかけられた。
「ひぅッ!?」
顔面に胃液を受け、アリスは遂に触手の中に尻餅をついてしまった。
「んんッ、この雑魚モンスターがッ、調子に乗って……ッ！」
粘液でびっしょりと濡れてしまってはいるが、見たところ怪我などはないようだ。胃液も匂いはキツそうだが、消化作用などはどうやらないらしい。
（そ、そうだよな……いくらなんでも、人間を喰うのは、ないよな……）
改めて考えると直前までの自分の危惧がバカバカしく思えて、圭一は全身から力が抜けるのを感じた。
「あぁッ、後で絶対運営にクレーム入れてやる！」
（腹もさっきよりは減ってないし、あとはこのまま吐き出してお帰り願う感じか……？　なんなら、ちょっと遊んでやるか……）
「ったく、折角作ったジャケットに匂いが染みてしまったじゃない……」
悔しそうなその顔を見ているうちに、男は触手を自然に動かし始めていた。
（そんな装備よりも、もっと気にする部分があるだろ……？）
「ひゃ……ッ!?」
ヒップを撫でられ、女ハンターは小さく悲鳴を上げる。
「ひゃ!?　や、んあッ!?」
予想していたよりストレートな反応に、圭一の悪戯心は俄然燃え上がった。
（へぇ……こういうのは意外と慣れてないのか？）
「この触手……なんの真似だ……!?」
（フフフッ、焦ってる焦ってる……）
戸惑いも忘れ、次第に大胆に触手を動かし始める。
「ンッ、くはぁッ……や、やめろッ！」
触手をジャケットの下に差し込み、胸当ての上から膨らみを撫でる。
「やめろッてば！　このヘンタイッ！」
（おぉ、怖っ……でも、HPは回復していないままだな……また暴れる前に生意気なこの口を少し塞いでやるか）
圭一は、ほくそ笑み、胃の底部をリズミカルに波打たせる。
「はうッ!?　こ、今度は何だッ!?」
革製のスカートがずり上がり、黒い下着に包まれたヒップが、ぷるんぷるんと揺れ出した。
「だからやめろって言って……ッ、んッ、はぁッ……!?」
騎乗位じみた格好に、男勝りのハンターが遂に両手で顔を覆う。
（お、いいじゃないか、可愛い声出しやがって……！）
カチャカチャとベルトが鳴るのを聞きながら圭一はアリスの乳房に触手を纏わりつかせた。
（そうだ、この感触……ッ、柔らかくて、温かくて……ハァッ、堪らないッ！）
想像していたよりも重たく柔らかい乳房の感触に、圭一はすっかり我を忘れていた。
（まさかこんなゲームの中で愉しませてもらえるなんて、俺もまだまだツいてるもんだな……）
「やめ……んくぅッ、コイツ……ッ！」
先端から粘液を出しながら、触手は乳首を突き、乳房の根元を締め上げて刺激する。
「んッ……!?　はぅぅんッ！」
とうとう女ハンターは座り込んだまま仰け反ってしまった。
「んあッ、や、やめ……ッ」
（いいよアリス……ッ、お前のおっぱい、もっちりして、とても、美味そうだ……喰らい付きたいよ……ッ！）
夢中になって乳房を絞り上げていた圭一だったが、ふと、女ハンターのスカートの中から甘い香りが漂っている事に気付いた。
（この女、触手で感じてる……!?）
ヒップの間に触手を伸ばし、下着を引っ張ってみる。
「ち、違う！」
女ハンターは慌ててスカートの裾を直そうとした。
「これは胃液の、毒液のせいだッ！熱くて生臭いから、頭が、ぼーっとなって……！」
一人で言い訳をするその顔は、しかしもう真っ赤だ。息は荒いままだが、明らかに切なげなものに変わっている。
（そんな事言って、もうビチョビチョじゃねぇか……なぁ、ありすちゃん？）
ペチョ……ッ。
下着と僅かに開いた肉花弁の間に、とろみの付いた粘液がはっきりと糸を引いている。それを触手の先端で掬い取り、男は味わってみた。
（なんだコレ？　美味い……！）
舌先に甘みを感じたと思った次の瞬間、その甘みは増幅され、全身に漣のように行き渡るのが分かった。
ペチョッ、ピチャ……ッ！
「ひぅ……ッ!?」
触手のゼラチン質のような半透明の先端が、陰唇を捉え、張り付いた。
（おぉッ、本当に指で触ってるみたい

火の国と水の国…
そこに百年の敵として互いに憎み合う
ヒュオオオオ…
忍びの里があった
またせたなウワバミ
約束通りこちらは一人だ
そのようだな…
それでは早速和睦の書に名を記して貰おうか
待ち受けるは肉獄の世界…
アカネ忍法帖
～淫惨呑まれ堕ち～
漫画 飛沫おろし
火の国の里頭首アカネよ
ニイッ

な…っ！水の国が和睦を!?

そうだ 今朝この書状が届いた二人きりで話がしたいと…

いけません…！アカネ様 これは罠です

ウワバミめ 今更何を虫の良いことを！

まあ待て 火の国と水の国は長年戦い傷つけあってきた…

もう私はこれ以上里の者を失いたくない

グッ

たとえ罠だったとしてもこれは二人きりになれるまたと無い好機なのだ…！

呼び出された場所は人里離れた森の中

奴の得意な水遁の術は効果が薄い…

ボウッ

いざとなれば私の火遁の術で対抗できる

必ずこの戦いに決着をつけてみせるわ

ぎゅっ

アカネ様…

もし一日たっても私が帰らなければ…

その時は任せたわよ

すっ

これでよいのだな…
確かに…
火の国頭首アカネの肉筆頂戴した
特に不審な点は無いようだな…
いや…しかし油断は禁物仕掛けてくると
しったら…
今…！
すっ
それではこれにて…
和睦の儀を始めようか…！
口寄せだと…っ!?
ざわっ
ボウッ
ボ
ゴ
奴が使う水遁の術じゃない…！
こんな巨大な蟲使いだなんて…
ぴっ
ありえな…っ
バクッ

馬鹿め！まんまとかかりおったわ！
お前が署名した巻物は我が里に代々伝わる口寄せの禁術…
精気を食らい異形を産む力を与えしヒルよ！
こやつ…二度とは使えない禁術を使ってまで…っ
お前を取り込み火の国を我が手中に収めることそれこそが真の和睦なのだ！
ぬとぉ
ぬとぉ
ぶくぅっ
くそぉ…
呑み込まれた…っ!?
く…苦しい…っ体が…動かない…っ
ダメ…意識が…遠く…
ポロッ

ぶばっ
なんだ…急に呼吸が楽に…
ほぁ
はぁっ
消化液で服が溶かされている…!?
シュウウ…
上半身が完全に呑み込まれて術を使うことができない…
ほぁ
ほぁ
ぬとぉ
ぬとっ
ねと
ねと
く…っ
このままではヒルに取り込まれてしまう…!
…っ!?
ぐにっ
股間に何か押し付けられ…っ
まさか…!
ぐぐんっ
じた
ばた
ぐぐぐッ
ぐぐぐッ
ぐぐぐッ
ぐぐぐッ
ぐぐっぐっ
ぐっ!!
ずぷっ
ぬぷっ
ぬぷっ
ぬぷっ
ぬぷっ
ゴリュ
ゴリュ
ぬぷっ
ぬぷっ
ぬぷっ

剣を掴むはずの手に肉棒を握り
借金女騎士は男の欲望に
奉仕する！
ピンサロ女騎士
悪徳大臣様がご指名で～す！
小説 NOVEL／木森山水道（きもりやますいどう）
挿絵 ILLUSTRATION／冥土黄泉（めいどよみ）

1

「職権濫用、贈収賄、癒着……数々の不正を働く悪徳大臣ザウジュめ、今こそ逮捕だ」

K王国のよく晴れた午後。

部下たちと共にやってきた女騎士レインは、大臣の執務室の前で力強く呟く。歳は二十歳。この国の成人年齢である十六歳で試験をパスし、犯罪を取り締まる騎士となった。

数々の功績を挙げた彼女は、王都で話題の美人でもある。

正義感に燃えて溌剌としている乙女は年齢よりも若く見え、十代後半の真っ直ぐな面差しをしていた。明るい金色の前髪を几帳面に切りそろえ、馬の尾に結んだ後ろ髪を腰まで綺麗に流し、ストイックな鎧に身を包む姿は生真面目な印象を強める。一方で、均整のとれた一六〇センチの身体と、騎士の短いスカートから覗く黒いニーハイソックスの太ももは健康的な色香を醸し出し、女の温かみを放っていた。

「とはいえ、状況がわかれば自首するかもしれない。大臣という要職を務めた者へのせめてもの情けだ。あまり刺激しないよう一人で行く。お前たちは待機。誰も近づけさせるな」

自分よりも背が高くて年上である配下の騎士たちに命じ、ノックなしで入室。

「失礼する、ザウジュ大臣殿。わたしは治安部のレイン。貴殿を逮捕させていただく」

逮捕状を突き出して、執務机に座る男に告げる。彼が悪徳大臣ザウジュだ。

年齢は五十歳ほどだが、精力的な顔立ちで十は若く見える。頭頂部は広く禿げているのに、側頭部からはミノタウロス――半牛半人の魔物――のツノみたいな黒髪が伸びている。上背のある一七五センチくらいの身体は丸々と肥えていて、強い威圧感を醸し出していた。

「フン。木っ端騎士の女め。わしを逮捕するなどというくだらんことはよせ。いくら欲しい？　カネをやるから諦めろ。妻に迎えて贅沢三昧させてやってもいい」

温情の気持ちは即座に消滅。女騎士の長く清廉な髪が逆立った。

「大金も贅沢も求めん！　わたしが欲しいのは、国民が安心して生きて死ねる世の中だ！　不正は人々の働く意欲を奪い、健全な経済の発展を阻害し、皆の生活に悪影響を与え、それを邪魔する。父のこの教えと、名に込められた雨のように悪を洗い流す者になってほしいという願いを背負う者として、貴様のように愚劣な拝金主義者は逮捕する！」

「無知な小娘め！　国が不正と決めた物事は、愚民がしたら国が混乱する事柄であり、能力もないのに力を持った馬鹿を排除するためのシステム。わしのように能力が優れ、国を真に憂いている者はなにをしてもよいのだ！」

「黙れザウジュ！　理論武装のために憂国者を気取るなど汚らわしいにもほどがあるぞ！」

「懐柔を拒むのならばここで朽ち果てるがいい。貴様を亡き者にした後は、カネと権力を駆使し、逮捕状の発行は不正だったとでっちあげる！　者ども出合え、曲者だ！」

大臣の部屋は完全防音。怒鳴り合いは廊下に聞こえない。しかし、同じく大臣の部屋である隣室には声が届く。隅の出入り口からぞろぞろと騎士が現れた。

「うへへ、女騎士レインか。ザウジュ大臣様に噛みつくとは、とんでもない牝狗だぜ」

「結構強いと聞くが、この場所、この人数で勝てるものか」

「身の程知らずのじゃじゃ馬を生け捕りにして、調教してやろうぜ！　アヒャヒャ！」

五、六人が物騒な気配を隠しもせずに囲む。

「ザウジュの親衛隊か。主が主なら部下も部下だ。野卑な者ばかりではないか」

剣を抜いた刹那、男たちが一斉に飛びかかった。腐っても身辺警護を任される騎士。動きは飢えたモンスターのように鋭い。

「悪を裂く聖なる剣よ。青き魂を対価にその力を示せ。〝サウザンドスラッシュ〟！」

魔法――精神力で世界に干渉する技術――が発動し、青白く輝く剣。のしかかるように殺到していた男たちが残らず吹き飛び、壁やソファーにぶち当たる。

「うおおおおお！　鎧が……服が……細切れにされた！」

すぐに立ち上がった男たちだが、その場にへたりこむ。身につけていた物は皆、パンツを除いてキャベツみたいに刻まれて、紙吹雪よろしく散っているのだ。

「公務執行妨害罪である！　まだやると言うのなら、今度はその身を刻まれると知れ！」

男たちはそろってガタガタ震える。手向かいする者はいない。大臣は不気味に笑う。

「そうだ。こうであるべきなのだ。清く正しく美しいお前に捕まることで、わしらの因縁が始まった……グヒヒヒ！　笑いが止まらんわい」

「なんだ、気が触れたのか？」

薄気味悪いが、我慢して手錠をかける。レインは知るよしもない。彼女を標的とした悪徳大臣の陰謀は既に始まり、このときにはもう、止めようがなかったことを。

2

「な、七百万の借金だと!?」

「その通りでございます、レイン殿」

「たった一カ月でこれだけの負債を父

が作ったというのか！　酒と女と賭け事などで！　父はこれまで一度たりとも、そんな遊びをしたことはない。それくらい立派な騎士なのに！」
「ここ一カ月で遊興を覚えられたご様子ですよ。お父上は、あなた様が管理を任せていた分も含めて蓄えを使い尽くし、あなた様のも含めた私財を売り払い、あるいは担保にしております。他に財産と言えば、ご自身の恩給のみ。ご家族の困窮を見過ごせない性格ですから、あなた様の給金を含めてもいいでしょう。それを合わせて生活費を引いた額が月々の利息を下回りましたので、こうして返済計画を伺いに参りました」
　邪魔した配下もろとも大臣を牢屋に放り込み、意気揚々と帰宅した女騎士レインを待っていたのは、黒い噂が絶えない民間金融業者――悪徳高利貸しだった。
　レインに兄弟はない。母は数年前に他界。今は、騎士用の公営住宅で身内であり退職騎士である父と質素に暮らしている。彼は証文を見せる借金取りに反論ひとつせず、死人のような顔でうなだれていた。
（なんてことだ……絶体絶命ではないかっ）
　自分で返せないなら他人から借りるしかないが、額は多く、また借金の理由が情けない。普通ならば貸してくれる者などいない。仮にいても、こんなことが世間に広まれば、就いている仕事の責任が重大なだけに、やめさせられてしまうだろう。単にカネを稼ぐためでなく、生きがいでやっていることなのだ。そんな事態は絶対に避けたい。
「とはいえ、レイン殿も大変でしょう。よろしければ、ご提案させていただきますよ」
　事情など海千山千の商人にはお見通しに違いない。恩着せがましく言ってくる。
「お仕事をご紹介します。昼はこれまで通り正義の騎士として、夜はそこのアルバイトとして労働なさってはいかがでしょう。その筋の高級店として繁盛している飲食店ですから、かなり稼げますよ。知られたくない方々に知られることなくね」
「わかった……ご厚意に感謝する」
「こちらこそ、ご承諾いただき感謝します。お陰で焦げつかなくて済んだ。日夜、正義のために働くあなた様を快く思わぬ者に悪用されるその前に、方々のお父上の負債を買い集めた甲斐もあったというもの。店には話を通しておきます。近い内にお訪ねください」
　所在地を告げると証文を大事そうに懐にしまい、男は出ていった。
「殊勝なことを言っていたが、なにを企んでいる……」
　今まで生真面目に生きてきて、自分の憧れでもあった父が悪い遊びを覚え、いつの間にか多額の借金を作っていたなど、明らかに異常だ。そこへ、悪名高い金貸し。胸騒ぎがしてならなかった。

3

「ぴ、ピンサロ!?　この店はピンサロ……ピンクサロンなのか!?」
　女騎士レインの声が驚きのあまり上擦った。
　翌日。休みを取った彼女は口が堅くて信頼できる医者に父を連れていった。午後は紹介されたお店こと《ヘヴンイリュージョン》へ。無人の待合室のカウンターには、角が生えた目出し帽を被る赤ずくめの太った中年がいた。赤いオーガ――魔物の鬼種族――みたいな従業員は、信じられない説明を始めたのだ。
「そ。ここは、コスプレ女子がウリのコスプレ系ピンサロ。知らなかったの？」
「飲食業としか……」
「ピンサロも飲食業だけどさ」
　ピンクサロンこと通称ピンサロは、ソファーを置いて間仕切りで区切ったブースに男性客が入り、嬢と呼ばれる女性コンパニオンに一対一で接客される店だ。飲食物だけでなく女性の性的なサービスも提供される。どちらかというと後者がメインで、ディープキスを含んだキス、カラダへのお触り、フェラチオ――口を使ったペニスへの奉仕――が主な内容だ。仕事柄、この手の店の知識もあるレインは胸中で呟く。
（こういうものには違法な店もあるが、わざわざわたしに紹介したのだから、問題ないのだろう。しかし、見ず知らずの男に性的なサービスをするなど、抵抗があるぞ）
　とはいえ、他にいい金策があるわけでもない。借金騎士は働くことにする。
「未経験者ですが、どうぞよろしくお願いします」
「いやぁ、あの正義の女騎士レインちゃんと働けるなんて、ツイてるなァ。オレ、大ファンなんだよ。あ、オレのことは『講師』って呼んで。それで通ってるから。実際に、講師なんだよ。この店の場合、きみみたいな新米ピンサロ嬢に研修を受けてもらうんだけど、その先生ってわけ。今は、出張してる店長の代わりで店長代理もしてるんだけどね」
　中年はカウンターを出てソファーに向かう。宿の一室ほどの広さ。焦げ茶色で清潔な壁に囲まれた待合室には、カウンターの横手に緑色でフラットタイプのものが並んでいる。そのひとつの前で彼は脱衣。服も下着も脇に纏め、顔以外は素っ裸になる。
「な、なにをしているんです！　誰か来るかもしれませんよ！」
「裸になったのは、さっそく研修を受けてもらうため。他の人間のことは気にしなくていいよ。開店前だから滅多に来ない。おかしなことをするわけじゃないし、万一来ても問題ないさ」
　彼は足を開いてどっかと座る。フラットタイプのソファーは少し軋んだが、

著者近況　こんにちは。面白いと思っていただけましたら、本誌のアンケートで出版社様にお伝えいただけますと幸いです。最後に、冥土黄泉先生に御礼申し上げます。素晴らしいイラストを本当にありがとうございました。

それだけ。反発力の強い素材は、ほぼ平面の原型のまましっかり男を支えている。

男の肉体はそれほど見苦しくなかった。生白い肌の太った肢体だが、腹は太鼓のように引き締まっていて、段差がひとつもできていない。体毛は陰嚢も含めてすべて剃られており、生まれたての赤ん坊のようにツルツルだった。

「ほら、こっち来てよ。チンポの前で跪いて」

「ち、ちんぽ？　ペニスのことか……その前に跪くだと……？」

「それと、格好は騎士の姿でね。魔法でいつでもなれるんでしょ？　本格派コスプレがウリの店だから、色々な職業の知識はあるんだ。あ、口調も騎士として働いているときのでいいよ。きみには騎士姿で働いてもらおうと思うから、練習からそうして」

「わかりました。いや、承知した……それにしても〝衣装変換魔法〟を知っているとは……思った以上に真面目な商売なのだな」

舌を巻く女騎士。彼の言う通り、騎士は魔法で衣装を替えられる。もっとも、魔法の道具ことマジックアイテムが必要だが。それはイヤリングで、いつどこで事件が起きても働けるよう、レインは非番でも身につけている。

「〝トランス・ナイトフォーム〟！」

イヤリングに触れて魔法を唱える。彼女は光に包まれ、騎士の鎧姿に。

「うはぁ、本当に変身した！　あぁ、正義の騎士姿は格好いいなぁ、美人可愛いなぁ」

男ははしゃいで身体を揺らす。

「これは……ペニスが長くそそり立ち……根元からビクンビクン震えているではないか！」

移動して跪き、鼻先の男根の様子に目を白黒させる処女騎士。

「レインちゃんがあまりにも魅力的だから、あっという間に元気になっちゃった」

「知識で知っている。勃起というやつだな……初めて見たが、なんてすごい」

つい、まじまじ見てしまう。

中年の男のシンボルは、二十センチ以上はありそうだった。女の手では握りきれない太さといい、ミミズみたいな血管が無数に走っていることといい、全体的に黒ずんで、日焼けしそうな強い熱気を放っていることといい、凶器といいたくなる代物だった。とても、女性が受け入れて子供を儲ける生殖器とは思えない。陰嚢もかなり大きい。精子をたっぷり作っていそうではあるが、なんとも禍々しく思える。

「そんなに見られると照れるなぁ。もしかして、彼氏とヤリまくりのチンポ好きなの？」

「失敬な！　わたしは仕事一筋。恋人もいなければ経験もない処女だぞ！」

「へぇ、処女！　そいつは意外だ。こんなに美人で素敵なのに。じゃぁ、処女のきみをオレのチンポで立派なピンサロ嬢に育ててあげる！」

「よ、よろしく頼む……」

他に言葉が思い浮かばずに言うと男は満足そうに頷く。次いで横に手を伸ばす。ズボンのポケットから、黒い輪に赤い十字の小物がついたチョーカーと白いタオルを取り出した。

「チョーカーのほうは、性病予防作用のあるマジックアイテム。着ければすぐに効果が出るから、今すぐ着けて。タオルのほうはいつも温かく湿っていて清潔な清拭用マジックアイテム。しゃぶる前にはこれでチンポを拭いてスッキリしてもらうことになってるから」

「うむ……」

レインはチョーカーを首に着け、タオルを受け取った。

「自分がしゃぶるチンポなんだから、しっかり綺麗にするんだよ。竿だけじゃなく、先っぽの亀頭も、カリの裏も……裏筋の細かい隙間があるところも汚れが溜まるとこだから。玉袋もきちんとね。デリケートな部分だし優しくだよ。赤ちゃんに触れるみたいにさ」

「わかった」

女騎士は片手でタオルを持ち、丹念に拭いていく。

「綺麗になったところで、いよいよおしゃぶりレッスンだ。騎士のお仕事をしてるときは堅苦しい指示を部下にバンバン出して、犯罪者を捕まえるときは勇ましい口上を言ってるそのお口で、牡らしさ全開のオレのグロチンポを咥えてよ」

「騎士がピンサロ嬢をしている背徳をいやに強調するではないか……しかも咥える？」

「そう。歯に唇を被せて亀頭だけを咥えるんだ。舌は下顎につけてね。そうして、皮の繋ぎ目や皮から飛び出してるカリの裏と触れさせるんだ。ほんとはチンポへのキス、チンキスからだけど、処女で初回だから、今はいいよ」

処女騎士は眉をひそめながら実行。硬く重い肉塊は大きく開けた唇を一回りは広げ、入り口の粘膜に密着し、さらにグイグイ広げてくる。

「頭を振ってレインちゃん。口の中でチンポを軽く締めながらね。そうやって、口内粘膜と唇のうらっかわで亀頭全体を、特にカリのところを擦るんだ。亀頭やカリはチンポの中でも特に気持ちよくなれるところなんだよ」

（この状態でも屈辱的なのに、さらに頭を振ってペニスを刺激するなどとは……わたしの口が性欲解消のための性器そのものになっているようだ……男のために奉仕するというのがこういうことだとは知らなかった）

セックスについて理解し始めた処女騎士は、言われた通りに頭を振った。几帳面に切りそろえた前髪や清楚に伸びる後ろ髪の毛先を、油を引いたフライパンみたいに跳ねさせながら、亀頭に吸いつき擦過する。

「おほっ！　いいねぇ、その調子その調子。かなり気持ちよくなってきたッ」

機嫌よさそうに褒める。実際、ペニスも良好な反応を示していた。火が点

著者近刊
『ツイン・アルステラ　調教洗脳で悪堕ちする正義のヒロイン』『純真戦士キューティウィンド　触手の魔悦に魅入られて』『見習いショタ騎士のハーレム学園性活』『子作り教室　ライバルお嬢さまの幸せ計画』ほか
好評発売中！

いたように一段と熱を帯び、鉄のように硬くなっている。
「そろそろ、奥まで咥えてみよっか。チンポの先から根元までを、大胆に往復するんだよ。全部を刺激して、さらにオレのチンポを興奮させるんだ」
ここまで来て、やめることなど考えられない。ピンクサロンで働くと決めた女騎士は、根元まで咥え込んだ。
（う……口の中が弾けそうだぞッ）
硬く膨張し放題のドス黒いペニスに唇も口内も内側から広げられ、逸物の形だけでなく脈打つ強さやタイミングも、信じられない体熱や牡臭さも刻まれながら、性奉仕。ストロークが長くなった分、より激しく頭を振る。清廉な髪を跳ねさせ、おどろに乱れさせながら、中年講師ペニスに快楽サービス。
「いいよいいよォ！　正義の美人騎士の濃厚フェラチオ！　やっぱり、騎士姿でチンポしゃぶってもらえるのは格別だなぁ！　しかも、仕事一筋のお堅い処女ちゃんだもん！　真面目な若い子に魂が汚らしい中年のチンポを口奉仕させるの最高！」
後ろに手をついて腰を突き出し、一ミリでも深く肉棒を侵入させようとする。はち切れんばかりに膨れあがったペニスは、口で一気に根元からカリ首までを扱かれる度に、ぴゅっ、ぴゅっと先走り汁を吐いている。
「んあぁ……なんはでてひたぞ……！」
「我慢汁さ。レインちゃんのお口が気持ちいいから出ちゃう体液でね……おおッ！　そろそろ出そうだ、顔を引いてっ、チンポを出すんだよッ」
これまでの気さくな様子が嘘のように荒っぽく叫ぶ。すぐさま言う通りにするレイン。顔を引いて吐き出すと、勢いよく勃起が飛び出る。女騎士の唾で濡れそぼつ剛直は、数本の唾液の糸を引っ張りつつ、垂直にそそり立った。
「処女で最初だから、口内発射は勘弁してあげる。代わりに顔にかけさせてもらうよっ。チンポに顔を向けて。目を閉じながら口を開けて舌を出すんだ。顎の下に両手を添えるのを忘れないでねッ！」
その場に立ち上がる中年講師。先走り汁が溢れて糸を引く剛直を掴み、初心者のフェラチオとは比べものにならない猛烈な手淫を始めた。
「しょ、承知した」
男性経験のない処女は、射精直前の気配に圧倒された。牛馬のように息を荒らげて分身を扱き始めた男の言葉に従って、舌射待ちポーズをとってしまう。
「いいよ、最高だ！　オオっ！　親の借金のために性を売る正義の女騎士に顔射！　不正を許さず断固戦う心の清らかな処女レインの舌に、魂の汚らしいオレの牡汁をぶちまけて染める！　わしのザー汁発射待ちウブエロ顔に思い切りぶっかけ！」
ビュルッッッッ！　ビュルルルルルルルル！　ビュルッ、ビュルルッ、ビュルルル！
「うあああああ～～～！」
悪徳大臣逮捕の折、腕の立つ配下に囲まれても平然とし、簡単に返り討ちにした女騎士が、みっともなく悲鳴を上げた。
中年はここぞとばかりに連射。フェラチオで乱れた前髪にも、きりりとした柳眉にも、すっきりした頬にも、無防備に開く瑞々しい乙女の唇にも、従順に突き出されている舌にも、細く引き締まった顎にも、受け皿みたいになっている手のひらにも、狙って射精。お湯のように熱くて、磯の香りを煮詰めたみたいな種汁臭の塊を引っかけて、ドロドロに染めていく。気が済んだところで、ラクにして目を開けるように言った。
「よかったよレインちゃん……ぶっかけられた顔も堪らなくエロい。今拭くよ」
中年は気さくな様子に戻っていた。側の自分のズボンからマジックアイテムのタオルを取り出し、自分で汚した女の顔を綺麗にしていく。手つきは壊れ物を扱う具合で、先ほどまでの荒々しさは嘘のよう。研修のためとはいえ、屈辱的で恥辱的なことをされたのもなんだか許せる気持ちになる。
「感謝する……」
「さっきは荒っぽくなってご免ね。処女のレインちゃんにはわからないだろうけど、可愛い女の子や、憧れてる子を相手に射精するときって、男は凶暴になるものなんだよ。きみがあんまり魅力的なものだから、抑えがきかなくなっちゃって」
「そうだったのか……ならば仕方がないな、講師殿」
「許してくれてありがとう。じゃ、開店までまだ時間があるし、研修を続けるよ。七日ほど受けてもらうね。オレのこのチンポで指導して、女の経験値を上げてあげる」
女騎士の唾液と自分の濃厚精液にまみれた中年のペニスは、一度射精したのが嘘のように力を漲らせた。

4

「七番ブース、七番ブース、レーンさんご指名入りました～、七番ブースにレーンさんご指名入りました～」
場所は《ヘヴンイリュージョン》。薄ピンクの光が満ちる中、天井の魔法のミラーボールがそこかしこを七色に明滅させ、妖しげな音楽が高く流れる店内にアナウンスが響く。
（いよいよだ……わたしはこれからピンサロ嬢としてデビューする）
緊張した面持ちで控え室から店内に入ったのは、病気対策のチョーカーと鎧をつけた女騎士レイン。レーンとは彼女の源氏名で、七日間の研修を終えてそうそう、お客の指名を受けたのだった。
（初めて営業中の店内に入ったが、すごいものだな……）
狭めの通路を歩きながら表情を固く

あれ？
男性経験無いんですか？
それにしちゃビラとクリが大きすぎだな…
オナニーばっかりやってるんでしょ？
どれくらいやってるんですか？
……
言ってください
し…週に1…2回…
へぇ…
エルフの護衛騎士は週に2回もオナニーするんですね
立派なオナニー中毒ですよ
処女なのに♥
ち…ちがう!!
どうしてこうなった？
何が違うんです？

エルフの国の宮廷魔導師になれたので姫様に性的な悪戯をしてみた THE COMIC

第6話

漫画COMIC／時丸佳久（ときまるよしひさ）
【原作】磯貝武連
【キャラクター原案】成海クリスティアーノート

もうヌレヌレじゃないですか
見ての通り
アイシャ様♥
私は奴隷の暗殺に失敗したのだ

原作・二次元ドリーム文庫
1～2巻好評発売中！

だが奴に敗けたという訳ではない　私の意志でこうなったのだ

…ですが身も心も魔道具で抑えるには硬すぎます

特別メニューでほぐしますね

ブンッ

姫様を守る為に！

半刻前

ふふふ

ふふふ

次は姫様にどんな授業をしてあげようかなぁ

いい加減にしないとまた追われる身になっちゃうニャー

ひもじーのはもう嫌ニャ！

その時はその時！今できる事は今犯るのだ！

ドッシッシ

ゲースとはホントよく言ったものなのニャ…

ん？

…風？

ファッ

じゃ…

ないっ！

危にゃいご主人っ!!

んあ？

うお!?
貴重な巻物(盗品)が!!?
な…にしゃが…
こっ…のっ駄猫…っ
ボわーっ
!!
賊か!!
透明魔法!?
目を瞑れルー!!
しかもかなり高度な!

あそこニャ!!
任せた!
!
なんと…
くっ…外套がっ…
ええい
もはや姿など!!
アイシャ…様

ひっ

なっ…何をなさいますっ!!

シラを切るなっ

貴様の悪行っあの外套で確かめた!!

んげっ!?

貴様が洗脳魔法でナイア様にさせた事…すべてな!!

まってまって

せっ洗脳魔法ではありませんっ

あ…あれは姫様の御意志!!

御意志だと!?ふざけるなっ

ひっ姫様の魔力を引き出す為に用いた伝説の魔道具が

俺と融合を始めたのです

バジリスクを退けた俺と完全に融合してしまえば

この国に甚大な被害をもたらす事は確実!

それを防ぐ為姫様は自らあの儀式を行ったのです!

責任はわたくしにあると…

なんと健気な姫様…

そうか…

わかった

では貴様が死ねば万事解決だ!!

死ねぇっ

ですよねーっ

前線から戻ったアレスの前で「ノー着衣デー」の後宮では
酒池肉林が繰り広げられていた!
魔剣士リネ2
乙女穢されし戦場
【第8話】聖巫女と淫乱イベント
原作／まくらカバーソフト
小説／酒井仁 挿絵／桐島サトシ

1

「ぎゃあああっ、う、腕がぁあっ」
憎き裏切り者、ヒッピアの将軍カシムは、自らの身に宿した魔の力の暴走によって命を落とした。
カシムが滅びた後に、不気味な紫色の籠手が残され、アレスは兵士にそれを運ばせようとしたが、武具に触れた兵の腕はみるみる腫れあがった。
「どうするアレス、放置するかい？」
エルヴィンの言葉に、アレスは首を横に振る。放置すれば、また誰かがカシムのようにならないとも限らない。
「おやおや、魔武具とはまた物騒なものに出くわしたものよ」
「あ……なた、は？」
アレスに気配も悟らせずに近づいていたのは、妖艶な美女。大胆に肌を露出した赤のビキニ鎧に水色の長手袋。
長い髪は深い紫色で、神秘的な紅の瞳にはどこか年齢を窺わせない深い知性を感じる。マントや装飾品から魔導士と思われる女はベトリヌスといい、はるか西方の大陸から、魔法の修業のためにこの地を放浪しているらしい。
「貴女はこれについてご存じなのですか？」
得体の知れぬ女魔導士に敬意を払う若き将軍に、ベトリヌスは少し興味をそそられたように目を細める。
「それは呪われし魔武具。人が触れれば瘴気に侵されるか、魔武具に魅入られ自らも魔物と化し、いずれ身を滅ぼす。じゃが、聖なる力によって解呪することができれば、またとない強力な武具となろう」
「で、では貴女にはそれが」
だがベトリヌスはあっさりと自分には無理だと言った。
「とはいえ、一時的に魔力を封じるくらいはしておいてやろう。それで運ぶことはできるはずじゃ」
「あ、ありがとうございます！」
「では、縁があればまたどこかで会うこともあろう、さらばじゃ」
そう言って魔武具に封印を施すと、謎の魔導士は髪をなびかせて去っていった。
「なんだか不思議な人だったね。で、これからどうするんだいアレス」
「うむ、これはダイヤモンドシティで保管した方がいいだろう。ワインバーグ殿に相談できればいいんだが」
それなら、とエルヴィンはアレスにいちど帰還することを勧めた。
「いちどバロック王に戦況報告もしておいた方がいいし、キミは少し戦線を離れて身体を休めるべきだよ。なに、国境の守りは任せておいてくれ」
いま最前線を離れることには不安もあったが、エルヴィンとミュリエルの勧めもあって、アレスは魔武具と共にダイヤモンドシティに帰還することとなった。とはいえ、すぐにバロック王に目通りできるわけもなく、まずはアウラ神国の神官長ワインバーグに魔武具を検分してもらうことにした。
「むう、なんとおぞましき魔の力。アレス殿の話から察するに、ヒッピア軍の背後で魔族が暗躍しておるやもしれぬな」
さすがはアウラ神国の神官長。時間はかかるが解呪できるだろうということでアレスは魔武具をワインバーグに預け、バロックの実妹であるクロエに会いに行った。
「申し訳ありません、アレス将軍。兄君さまは、いえ聖王陛下はその、大事なお役目に明け暮れておりまして、なかなか時間が取れず……」
クロエは緑の髪も美しく、穏やかで聡明な大人の女性。それでいて、剣の腕も確かな気高き女騎士。実は幼き頃アレスと共に時を過ごしたこともある、旧知の仲だ。
「いや、クロエが謝ることはないよ。聖王陛下のお役目の重要性は理解している。しかし国境で戦っている兵たちの状況について、ぜひご報告させていただきたいと」
「それについては確約いたします。アレス将軍も連戦でお疲れでしょう、この機会にお身体をお休めください」
正直……アレスはバロックに対し、王の器たるものを感じたことはない。
だが彼が聖王の血を継ぎし者であることは事実なのだし、みなが聖王を心のよりどころとしているのも事実。バロックが世継ぎ作りにこだわるなら、アレスにそれを阻む理由はない。
ない、のだが。
（リーネ……結局、すれ違ってばかりで別れも言えなかった）
「そういえば、マルティナさまがどうされているか知らないかい。城内でお見かけしなかったんだが」
アレスの言葉に、クロエは顔を曇らせた。なんと今は亡きルートヴィッヒの妻、マルティナはバロックの後宮でメイドをしているというのだ。
「前聖王の妻が後宮のメイドに⁉」
「これは、マルティナさま自身が望んだことなのです。ルートヴィッヒさまを喪い、ジュリアンさまも既になく、この上は現聖王であるバロック王にお仕えするのが本義であると仰られて」
それはいかにもマルティナらしいふるまいであるようにアレスは思う。なにより本人の希望であるなら、アレスが口を出すことではないだろう。
（だが巷の噂では、バロック陛下は後宮に迎える女性を捜すために、新たな騎士団の結成を命じたという。そんな中で、マルティナさまは……）

2

聖王バロックは、大きな満足と大きな不満を抱えていた。
一つはついにあのストームランスの女王リーネの純潔を我がものにしたこと。はなから反抗的だったリーネはまだ完全に心からバロックに服従したわけではないが、成果は上々だ。
その一方、彼はいまだアウラ神国の女王にして聖巫女シンシアには手を出せずにいた。

シンシアの傍には常にシンシアの幼馴染だという少女武将マリオンがつき従っていて、バロックがシンシアと二人きりになることを妨害するのだ。
「シンシアさまは神聖にして冒すべからざる聖巫女。たとえ聖王さまであろうとも、聖巫女の御身に触れることは許されません」
聖王の強権を持って従わせることは可能。だがそれをすればアウラ神国、ひいてはアウラ信教そのものを敵に回しかねない。
(なに、焦ることはない。当のシンシアは世間知らずの小娘。うまく言いくるめてしまえば)
そのとき、マルティナが果実酒を持ってきた。かつては清楚で落ち着いた身なりだった前聖王の妻も、後宮では大胆に肌を露出した半裸に近い恰好をしている。
「お飲物をお持ちしました」
その恭順的な態度に、バロックは満足げに頷く。あのルートヴィッヒの愛妻が、あられもない姿で自分に従っているのは、実に痛快なことだ。
「そうだ――――よきことを思いついたぞ。マルティナ、我が血を受け継ぐ世継ぎは、もっと増やさねばならぬ。そのためのイベントを開くのだ」
「仰せのままに」
数日後、アレス将軍からの戦況報告もすっかり忘れ、バロックはシンシアを後宮に呼びつけた。
「横柄ね、あのオヤジ! アウラの聖巫女を軽々しく呼びつけるなんて!」
「陛下には陛下のお考えがあるのよ。聖王陛下をオヤジだなんて言ってはいけないよ、マリオンちゃん」
アウラ神国の女王にして聖巫女であるシンシアは、その聖なる力とは裏腹に、中身は年相応の、いやかなり世間知らずでお人よしの少女だった。
幼馴染のマリオンは、この危なっかしい幼馴染を守るために武将になったといっても過言ではない。
「それよりマリオンちゃん、いまアレスさんが帰ってきているそうよ。マリオンちゃんもお会いしたいでしょ」
シンシアの言葉に、女武将の顔がみるみる赤くなる。
「な、なんであたしがあんな奴に」
「マリオンちゃん、前線で戦ってるアレスさんを心配してたじゃない」
グスタフ王との戦いの中でアレスはなにかとシンシアを気遣い、マリオンは最初アレスを警戒していた。
しかし、若き将軍が真摯にシンシアのことを心配していることを知り、信頼を高めていったのだ。無論、シンシアもアレスのことは心より信頼し、好意を抱いている。
と、そのとき。
「シンシアさま、マリオンさま。お待ちしておりました」
後宮で二人を出迎えたのは、後宮を取り仕切るメイドのマルティナ。だがその姿を見たシンシアたちは言葉を失った。
「マ、マルティナ、さん……」
「な、なんで、なんで裸なの!?」
そう、マルティナは一糸まとわぬ全裸姿だったのだ。
「本日、この後宮は『ノー着衣デー』となっております。何人であろうと、衣服を身にまとうことは許されないのです。さあ、お二人も」
「じょ、冗談じゃないわよ!」
顔を真っ赤にする少女たちの前でも、マルティナは恥じらう様子もない。
「人は生まれてくるときはみな裸。すなわち裸は人のもっとも自然で原初の姿なのです。あらゆる束縛を脱ぎ捨て心を解放することで、聖王さまの望みはより確実なものとなるだろうと」
「そ、そうなんですの?」
「んなわけないでしょっ。こんなバカなことにつきあってられないわよ!」
「聖王さまの望みはハイランドの平定。ひいては大陸全土に平和と平穏をもたらすことです。ぜひご協力を」
「……」
マルティナの顔はどこまでも真剣。シンシアは少し考え、彼女の言葉にある程度の真実味があるように感じた。
「マリオンちゃん、それがルールだというのなら仕方がないよ。私たちも脱ぎましょう」
「えっ、ちょっ、シンシア?」
細くて白いシンシアの指が、マリオンの強化服にかけられ、留め具を外していく。通常、強化服は本人の意思に反して脱衣させることはできない。だが上衣にかかるシンシアの手を振りほどくことは、マリオンにはできない。
「だってマルティナさんもあんな格好なんですもの。だから私も勇気を出して見せるわ」
聖巫女の証である宝玉付きの冠を脱ぐと、青き髪の巫女は長手袋をするりと脱ぎ捨ててマルティナに渡す。
「今の私はこの後宮を仕切るメイド。マルティナとお呼び下さい」
マルティナの肢体は、出産経験があるとは思えぬほどむっちりと肉感的で、シンシアもマリオンも思わず見とれてしまう。
そのたおやかな腕が魔法のように動くと、二人の少女たちの強化服はあっという間に剥ぎ取られ、下着だけになってしまう。
「や、やっぱり少し恥ずかしいね、マリオンちゃん」
下着姿になった少女たちを、マルティナは奥の間に手招きする。そこは芳しい香が焚かれ、高級そうな絨毯にクッション、色とりどりの花や果物で飾られている。
そしてそこには四人の美少女。
黄金の髪をたゆたわせたヘスティアの女王ベアトリスと、その忠実なる少女魔導士たちが思い思いに身をもたれさせ、妖艶に微笑んでいた。
言うまでもなく、四人が四人とも一糸まとわぬ生まれたままの姿で、果実

酒や菓子をつまんでくつろいでいる。
まるで一幅の絵画になりそうな幻想的な光景に、シンシアは自分たちだけが下着をつけていることが急に恥ずかしく思えた。
「まあいらっしゃいシンシアさん、マリオンさん。あなた方がここにいらしたのは初めてではなくて」
後宮に入ることをバロックに命じられてはいたが、シンシアは後宮での心得についての座学を受けていただけで、それはもちろんマリオンがバロックに対する防波堤となっていたのだ。
しかし、そのマリオンも目の前の裸体の饗宴に声を失っている。
「マリオンちゃん、私たちも」
「えっ……あっ、し、シンシア」
まだ幼さを残す太腿をさする手が、タイツをゆっくりと脱がせていく。マリオンと比べると明らかに豊満な乳房を背後から押しつけるようにして、とうとうシンシアは幼馴染を全裸に剥いてしまう。
新たに二人の裸体少女を迎えた部屋の中が、一気に華やかになる。やや落ち着いた雰囲気の水色髪の少女サブリナがグラスを用意し、オレンジのお下げのドロシーが果実酒を注いでシンシアたちに手渡す。
「少しお飲みになればリラックスできますわよ」
場に女性しかいないということで、シンシアは全裸姿に抵抗をなくしかけているようだ。ここは自分がしっかりしなければ、と女武将はくいとグラスを呷る。
それから半刻ほど、全裸の少女たちは歓談を楽しんでいた。
「ノー着衣デー」などというバカげたことを考えたのが誰なのか、考えるまでもないが、この程度の戯れなら……とマリオンもいつしか心地よい酔いに身を任せてしまっていた。
だから、気付かなかったのだ――――自分たちの背後にもう一人のゲスト、いやこの後宮の真の主が入室していたことに。
「ふふ、リーネ以外はみな揃っておるようだな」
「バロック聖王陛下、ようこそおいでくださいました」
連日連夜、美少女たちを抱いている聖王バロックの肌艶は、まるで少女たちから生気を吸っているがごとくに、若さと輝きを増していた。
牡としての自信を表す胸板、逞しい下肢、間近に見る男の裸身にシンシアもマリオンも言葉を失う。
「どうした、今宵は『ノー着衣デー』だと言ったであろう。それは当然、この聖王とて同じこと」
だが、マリオンを圧倒していたのはバロックの裸身だけではない。
あれはアウラ神国の聖都オリオールでのこと。お忍びで下街に出かけていたマリオンたちは暴漢に襲われ、シンシアを庇ったマリオンは男の茎をくわえさせられ、尻穴まで犯された。
しかし、バロックの股間に隆々とそびえ立つ肉竿の迫力に、マリオンは嫌悪を抱く余裕すらなかったのだ。
（お、男のアレってあんな立派なものだったかしら……）
てかてか光る先端は鎧兜を被ったかのよう。反り返った幹の部分に浮かぶ太い血管が脈打つと、重量感もたっぷりに揺れ動く。
数えきれぬほど女の穴を味わったそれは淫水で赤黒く灼け、まさに王者の風格を備えている。
（い、いけない！　あたしはシンシアを守らなきゃいけないのに）
そうだ、あのときのようにたとえ自分が犠牲になっても、アウラの聖巫女の純潔は守られなければならない。
そう言い訳しつつも、マリオンはバロックの肉棒から目が離せない。
「ええと、聖王陛下。アウラ神国のシンシアでございます。こちらは私の幼馴染で従者のマリオンです」
シンシアは優美な身ごなしで一礼するが、やはり全裸姿では落ち着かない様子だ。
バロックは鷹揚にうなずくと、どっかと部屋の中央に腰を落ち着け、ウェンディから受け取ったグラスをあっという間に空ける。
「うむ、ここは聖王と一部の選ばれし女しか立ち入ることのできぬ場所。だがお前の従者であると言うなら歓迎しよう。寛ぐがよいぞ」
マリオンは工兵隊を率いる技術武官であり決して高位貴族ではない。バロックの一言でマリオンは後宮を追い出されても文句は言えない。
だがベアトリスたちは、にこやかな笑みで洋酒入りのボンボン菓子を勧めてくる。香と酔いが相まって、なんだか夢心地な気分になる。
「マリオンさま、御覧の通りここは一切の身分から解き放たれた空間。聖巫女であっても武将であっても、共に等しく聖王陛下の御寵愛を受けることができるのですわ」
大人っぽいサブリナはたしか既婚者のはずだが、バロックの膝にしなだれかかって悩ましい声でそう囁く。
「それに、シンシアさまも初めての経験には戸惑われるでしょう。マリオンさまが世継ぎ作りをシンシアさまにお見せになるのがよろしいかと」
それがいいですわいいですわと口々に言いながら、少女魔導士たちの手がマリオンに絡みついてくる。
子猫のじゃれあいのような、けれど有無を言わさぬその行為に、マリオンは手足を押さえつけられ、一糸まとわぬ裸身を聖王の前にさらけ出す。
（世継ぎ作りって……あ、あんなおっきなものをあたしの中に？　ああ、シンシアがこっちを見ている）
しかしシンシアはマリオンを心配しているというよりは、バロックの獰猛な肉竿の迫力と、マリオンがこれから何をされてしまうのかという好奇心に目を輝かせているようだ。そういうと

著者近刊　『魔法少女W調教　フレイア&クリスタ』『引きこもり勇者のために美少女パーティーが一肌脱ぐようです』『乙女騎士団が隊の存続のために枕営業するようです』『お兄ちゃんが大好きな妹は実は「プロの妹」だったようです』
好評発売中！

ころ、シンシアは成熟した肢体とは裏腹に、あまりにも無邪気。
（そうだ、このオヤジがあたしの身体で満足すれば、シンシアには手を出さないかもしれない。ここはおとなしく身を任せた方がいいんだ）
むりやりそう自分を納得させる。だが本当は、目の前に迫る男根の巨大さ、そこから強く漂ってくる牡臭に自然と胸を高鳴らせている自分に、マリオンは気付いていなかった。
「今宵は特別な夜。一武将にすぎぬお前にも聖王の寵愛を受ける栄誉を授けてやろう。アウラの聖巫女シンシア、その目でしっかり見ているのだぞ」
「は、はい……マリオンちゃん、しっかりね」
おそらくは男女のまぐわいを理解していないであろうシンシアが小さく拳を握ってマリオンを励ます。
それからのことは、座学でしか男女の交合について学んでいなかったシンシアにとっては、まさに驚異としか言いようのない光景が展開された。
ベアトリスを中心とした少女たちは繊細な指の動きで、まだあどけなさの残る少女の肉体を愛撫し、ほぐしていった。
「まだ発育途上ですけれど、なんて美しい桃色のニップルかしら」
「それにベアトリスさま。下肢の付け根から漂ってくるのは、まぎれもなく処女乙女の芳香ですわ」
「あっ、ん、そんな、とこっ」
暴漢相手と違って相手は同じ少女、力任せに振りほどくこともできず、マリオンは為すすべなく乳房や股間、太腿を撫でさすられ、揉みほぐされる。
その美しい肉体にすっかり性の快感を刻まれた少女たちの手管は、一流の娼婦以上。うっすら汗をかいて上気する幼馴染を見るシンシアも、いつしか心臓をドキドキさせて魅入るよりなかったのだ。
「はぁ、はぁ……も、もう、これ以上は、お、おかしくなっちゃう……」
少女たちの愛撫を受け、愉悦に痙攣する自分がバロックに何をされてしまうのか、マリオンは理解していた。
たとえ相手が聖王でも、心を通わさぬ男に純潔を捧げるのはまっぴらだ。けれど、獲物を狙う蛇のようにゆらゆら揺れるバロックの陰茎を見ていると、嫌悪ではないなにかがマリオンの胸に生じているのも確かだった。
（ベアトリスさまは……あんなものを挿入されて、子種を出されて、悦びを感じてらっしゃっていたの？　聖王に抱かれるってそういうことなの？）
これがもし、アレス相手だったら。
少々朴念仁なところはあるが、まっすぐな気性を持つあの将軍が相手だったら、自分は受け入れただろうか。
一瞬、脳裏に浮かんだ青年の顔を必死に打ち消そうとすると、バロックの顔がすぐ前に迫っていた。
「んぅうっ……！」
分厚い唇がマリオンのそれを塞ぎ、ぬるりと生温かい舌が入ってくる。そして大きな掌で小ぶりの胸を揉まれると、「じわぁっ」と快感が広がって、マリオンは思わず甘い声を漏らす。
「んぅう、んはぁ……んっ」
「よしよし、かなり女の貌になってきたな。見ているがいい、シンシア。幼馴染が大人の階段を上るさまを」
バロックの手がマリオンの両膝の裏に当てられ、大きく押し広げていく。下腹部に萌える茂みはまだ淡く、その奥の花弁はなお幼い。
しかし聖王は拳ほどもある亀頭でおもむろに少女の入り口をこじ開けた。
「ぎっ……？」
一瞬菌を食いしばるマリオンに、バロックは興味深げに唇を歪めた。
「ふむ、リーネもそうだったが、女武将は鍛錬のせいか存外に抵抗が少ないものだな。これならばすぐ痛みが快感に取って代わるだろう」
「そ、そうなのですかバロックさま」
心配そうに友の顔を覗き込むシンシアの目を、マリオンはまともに見られない。破瓜の衝撃は声も出せないほどだが、少女の処女穴はしなやかにバロックに剛物を受け入れていたのだ。
（あ、あぁ、動いてる。あたしの中であのおっきいのがびくびくして……）
しかし全裸で組み敷かれ、しかもその姿をシンシアに見られている恥ずかしさは変わりない。懸命に顔を背けようとするマリオンを、シンシアはどこまでも生真面目に観察する。
ずるっ、ずぶぶぶ……やがてバロックはゆっくり、ゆっくりと腰を振り立て始める。
マリオンが処女であることに満足と興奮を覚えつつ、王族ではないということでじっくりとその卑賤な肉体を堪能するつもりだった。
「さあ己が主君の目の前で、存分によがるがよい。この聖王バロックが偉大なる子種を授けてやろう」
「あぁバロックさま！」
「なんと気高く情愛深き聖王さま」
じっくりと、着実に処女穴を開発するバロックの寛容さを、ベアトリスたちが口々に褒め称える。
不安と羞恥、そして身体の奥深くからこみ上げる、得体の知れない快感に、マリオンはいつの間にか自分からバロックの逞しい手足にしがみつき、腰に足を絡めていた。
「あぁあっ！　せ、聖王、さま！」
「シンシア、よく見るのだ。これが聖王の聖なる種付け……ッ！」
瞬きすら忘れているシンシアの前で、バロックは悠然と腰を振るい、少女の膣穴を自在にえぐり続けた。そしてピストンの速度を一切緩めることなく、結合部分から「ぶしゅっ！」と白濁した液体が噴き出した。
「ひぃいいい、熱いひぃいいい！」
「この程度では我がマラは萎えぬぞ。聖王のもたらす真の快楽をその身に刻むがよい！」
「あひぃいい、はひいっ。なにこれ、

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/